

インストールガイド (Solaris 版)

Sun™ ONE Calendar Server

Version 6.0

817-4331-10
2003 年 12 月

Copyright © 2003 Sun Microsystems, Inc., 4150 Network Circle, Santa Clara, California 95054, U.S.A. All rights reserved.

Sun Microsystems, Inc. は、この製品に含まれるテクノロジーに関する知的所有権を保持しています。特に限定されることなく、これらの知的所有権は <http://www.sun.com/patents> に記載されている 1 つ以上の米国特許および米国およびその他の国における 1 つ以上の追加特許または特許出願中のものが含まれている場合があります。

このソフトウェアは SUN MICROSYSTEMS, INC. の機密情報と企業秘密を含んでいます。SUN MICROSYSTEMS, INC. の書面による許諾を受けることなく、このソフトウェアを使用、開示、複製することは禁じられています。

U.S. Government Rights - Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

この配布には、第三者が開発したソフトウェアが含まれている可能性があります。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd が独占的にライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Java、Solaris、JDK、Java Naming and Directory Interface、JavaMail、JavaHelp、J2SE、iPlanet、Duke のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴ、Solaris のロゴ、SunTone 認定ロゴマークおよび Sun ONE のロゴマークは、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

Legato および Legato のロゴマークは Legato Systems, Inc. の商標であり、Legato NetWorker は同社の商標または登録商標です。Netscape Communications Corp のロゴマークは Netscape Communications Corporation の商標または登録商標です。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト (輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む) に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

目次

| | |
|------------------------------------|-----------|
| 表目次 | 7 |
| 図目次 | 9 |
| 本書について | 11 |
| 対象読者 | 11 |
| お読みになる前に | 12 |
| 内容の紹介 | 12 |
| 表記上の規則 | 13 |
| モノスペースフォント | 13 |
| イタリックフォント | 13 |
| 角括弧 [] | 13 |
| 縦棒 () | 14 |
| コマンド行プロンプト | 14 |
| サードパーティによる関連 Web サイト | 14 |
| 関連マニュアル | 15 |
| | |
| 第 1 章 インストールと設定の計画 | 17 |
| Directory Server の設定情報の収集 | 18 |
| 使用するスキーマの決定 | 19 |
| Calendar Server 6.0 の設定情報の収集 | 20 |
| 管理、ユーザー基本設定、および認証のオプション | 20 |
| ユーザー基本設定ディレクトリ | 20 |
| Calendar Server 管理者 | 21 |
| メールとメールアラームのオプション | 22 |
| 実行時設定オプション | 22 |
| Calendar Server の起動 | 22 |

| | |
|--|-----------|
| データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリ | 23 |
| Java Enterprise System インストーラを使用した Calendar Server のインストール | 24 |
| Calendar Server 6.0 の設定 | 24 |
| Calendar Server 6.0 のアンインストール | 25 |
| | |
| 第 2 章 Calendar Server 6.0 の設定 | 27 |
| Directory Server 設定 Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) | 27 |
| comm_dssetup.pl の機能 | 28 |
| comm_dssetup.pl を実行するための要件 | 28 |
| comm_dssetup.pl の実行 | 29 |
| サイレントモード | 29 |
| 例 | 31 |
| インタラクティブモード | 31 |
| Calendar Server 設定プログラム (csconfigurator.sh) | 36 |
| 「ようこそ」パネル | 38 |
| 「Administration, User Preferences and Authentication」パネル | 39 |
| 「User Preferences Directory」のオプション | 40 |
| 「Calendar Server Administrator」のオプション | 40 |
| 「Email and Email Alarms」パネル | 41 |
| 「Runtime Configuration」パネル | 42 |
| 「Select Directories」パネル | 44 |
| 「Ready to Configure」パネル | 45 |
| 「Configuration Summary」パネル | 46 |
| | |
| 第 3 章 Calendar Server データの移行 | 47 |
| cs5migrate ユーティリティ | 49 |
| 移行の所要時間 | 49 |
| cs5migrate の構文 | 50 |
| 移行プロセス | 50 |
| csmig ユーティリティ | 52 |
| csmig の機能 | 52 |
| csmig 要件 | 53 |
| csmig の構文 | 54 |
| csmig 移行手順 | 55 |
| LDAP ディレクトリサーバーの設定 | 55 |
| テストドライランの実行 | 55 |
| 実働データの移行 | 57 |
| csmig の使用上のヒントおよびトラブルシューティング | 59 |
| csvdmig ユーティリティ | 61 |
| csvdmig の構文 | 62 |
| csvdmig の実行例 | 63 |
| ics2migrate ユーティリティ | 63 |

| | |
|---|-----------|
| 移行要件 | 63 |
| 移行対象 | 64 |
| 移行プロセス | 65 |
| 2.x カレンダーデータベースのアップグレード | 65 |
| データベースをバージョン 3.2.9 にアップグレードするには: | 65 |
| データの移行 | 66 |
| 移行結果のチェック | 68 |
| 移行例 | 69 |
| カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方の移行 | 69 |
| 非出力モードでの移行 | 69 |
| カレンダーデータベースだけの移行 | 69 |
| LDAP ユーザー情報だけの移行 | 69 |
| カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方の移行 | 70 |
| ncs4migrate ユーティリティ | 70 |
| 移行要件 | 71 |
| 移行対象 | 71 |
| 移行手順 | 73 |
| Calendar Server 5.0 データベースのバックアップ | 73 |
| 移行準備 | 73 |
| データの移行 | 74 |
| 移行データのチェック | 77 |
| csrename ユーティリティ | 78 |
| csrename の構文 | 79 |
| csrename の例 | 80 |
| | |
| 付録 A 設定ワークシート | 81 |
| Directory Server 設定スクリプトのワークシート | 81 |
| Calendar Server 設定ワークシート | 83 |
| 「Administration, User Preferences and Authentication」パネルのワークシート | 83 |
| 「Email and Email Alarms」のワークシート | 84 |
| 「Runtime Configuration」のワークシート | 85 |
| データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのワークシート | 86 |
| | |
| 付録 B LDAP Directory Server の考慮事項 | 87 |
| LDAP サーバーのスキーマの手動更新 | 88 |
| Sun ONE または iPlanet Directory Server | 88 |
| Netscape Directory Server | 89 |
| LDAP スキーマディレクトリで重複する OID の解決 | 90 |
| | |
| 付録 C Calendar Server 5.x から 6.0 へのアップグレード / 移行プロセス | 91 |
| アップグレード / 移行プロセス | 91 |

| | |
|------------------|------------|
| XSL のヒント | 93 |
| 用語集 | 99 |
| 索引 | 105 |

表目次

| | | |
|-------|---|----|
| 表 1 | Sun ONE Calendar Server インストールガイドの編成 | 12 |
| 表 1-1 | 使用するスキーマの決定 | 19 |
| 表 1-2 | ユーザー基本設定ディレクトリのオプション | 21 |
| 表 1-3 | Calendar Server 管理者のオプション | 21 |
| 表 1-4 | メールとメールアラームのオプション | 22 |
| 表 1-5 | 実行時設定オプション | 22 |
| 表 1-6 | Calendar Server の起動オプション | 23 |
| 表 1-7 | データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのオプション | 23 |
| 表 2-1 | Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のオプション | 30 |
| 表 3-1 | Calendar Server 2.x のデータの移行 | 64 |
| 表 3-2 | LDAP 属性の移行 | 64 |
| 表 3-3 | ics2migrate オプション | 67 |
| 表 3-4 | Netscape Calendar Server 4.0 データの移行 | 71 |
| 表 3-5 | ncs4migrate ユーティリティオプション | 75 |
| 表 A-1 | Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のワークシート | 81 |
| 表 A-2 | 「Administration, User Preferences and Authentication」パネルのワークシート | 83 |
| 表 A-3 | 「Email and Email Alarms」のワークシート | 84 |
| 表 A-4 | 「Runtime Configuration」のワークシート | 85 |
| 表 A-5 | データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのワークシート | 86 |
| 表 B-1 | LDAP スキーマディレクトリの Calendar Server OID | 90 |

目次

| | | |
|-------|--|----|
| 図 2-1 | Calendar Server 設定プログラムの「ようこそ」パネル | 38 |
| 図 2-2 | Calendar Server 設定プログラムの「Administration, User Preferences and Authentication」パネル | 39 |
| 図 2-3 | Calendar Server 設定プログラムの「Email and Email Alarms」パネル | 41 |
| 図 2-4 | Calendar Server 設定プログラムの「Runtime Configuration」パネル | 42 |
| 図 2-5 | Calendar Server 設定プログラムの「Select Directories」パネル | 44 |
| 図 2-6 | Calendar Server 設定プログラムの「Ready to Configure」パネル | 45 |
| 図 2-7 | Calendar Server 設定プログラムの「概要」パネル | 46 |
| 図 3-1 | Calendar Server 移行ユーティリティの実行フロー | 48 |

本書について

このマニュアルでは、Solaris™ システム上の Sun™ Open Net Environment (Sun ONE) Calendar Server (旧称 : iPlanet™ Calendar Server) のインストールおよび設定方法について説明します。この章は、次の項目で構成されます。

- 対象読者
- お読みになる前に
- 内容の紹介
- 表記上の規則
- サードパーティによる関連 Web サイト
- 関連マニュアル

今回のリリースの最新情報については、次のマニュアル Web サイトの『Calendar Server 6.0 リリースノート』を参照してください。

http://docs.sun.com/coll/S1_CalendarServer_60

対象読者

このマニュアルは、Calendar Server 6.0 のインストールおよび設定を行う Calendar Server 管理者およびサポートスペシャリストを対象としています。

お読みになる前に

Calendar Server 6.0 をインストールする前に、次の概念について理解しておく必要があります。

- Solaris™ オペレーティングシステムの基本的な管理方法
- Sun Java™ Enterprise System インストーラ。『Sun Java Enterprise System インストールガイド』で説明
- Sun ONE Directory Server 5.x。ユーザーの認証、およびユーザー基本設定の格納に使用
- Sun ONE Identity Server 6.1。プロビジョニング用の CLI ユーティリティやシングルサインオン (SSO) など、Identity Server 機能を使用する場合
- Sun ONE Portal Server などのその他の Java Enterprise System 製品。Calendar Server 6.0 と統合しようとする場合

内容の紹介

表 1 Sun ONE Calendar Server インストールガイドの編成

| 章または付録 | 説明 |
|---|---|
| 本書について (この章) | 対象読者、前提条件、マニュアルの内容、表記上の規則、関連情報について説明する |
| 第 1 章「インストールと設定の計画」 | Calendar Server 6.0 をインストールおよび設定するための計画方法について説明する |
| 第 2 章「Calendar Server 6.0 の設定」 | Solaris システムで Calendar Server 6.0 および Sun ONE Directory Server 5.x を設定する方法を説明する |
| 第 3 章「Calendar Server データの移行」 | Calendar Server の移行ツールについて説明する |
| 付録 A「設定ワークシート」 | Calendar Server 6.0 の設定を計画するためのワークシートを示す |
| 付録 B「LDAP Directory Server の考慮事項」 | LDAP ディレクトリサーバーのスキーマを手作業で更新する方法、および LDAP スキーマディレクトリで OID が衝突する場合の解決方法について説明する |
| 付録 C「Calendar Server 5.x から 6.0 へのアップグレード/移行プロセス」 | Sun ONE または iPlanet Calendar Server 5.x から Calendar Server 6.0 にアップグレードおよび移行する方法を説明する |
| 用語集 | Calendar Server の用語について説明する |

表 1 Sun ONE Calendar Server インストールガイドの編成 (続き)

章または付録

説明

[索引](#)

表記上の規則

このマニュアルは、Solaris オペレーティングシステムの表記規則に基づいて記述されています。

モノスペースフォント

モノスペースフォントは、画面上のコンピュータ出力、または入力するテキストの表記に使用します。また、ファイル名、パス名、識別名、関数、コード例にも使用します。

イタリックフォント

イタリックフォントで表記されているテキストは、ユーザーがインストール固有の情報を使用して入力するテキストを示しています。サーバーのディレクトリパス、ディレクトリ名の表記に使用します。たとえば、このマニュアルでは、ディレクトリパスを次のように表記します。

```
cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/
```

この場合、*cal_svr_base* は Calendar Server のインストール先のベースディレクトリ、つまりルートディレクトリを示しています。

角括弧 []

角括弧 [] では含まれているパラメータは、省略可能です。たとえば `ics2migrate` 移行ユーティリティの次の構文で、`-q` と `-m` は省略可能なオプションとなります。

```
ics2migrate [-q] [-m ldap]
```

縦棒 (|)

縦棒 (|) は、水平方向に伸びるリストに含まれる選択肢を区切ります。たとえば、次の `-s`、`-f`、`-l` の各オプションでは、指定可能な選択肢があります。

```
ics2migrate [-q] [-m db] [-s def|none] [-f def|none]
             [-l min|max] ソース ターゲット
```

コマンド行プロンプト

コマンド行プロンプト (C シェルや `%`、Korn シェルや Bourne シェルでは `$`) は、このマニュアルの例では記述していません。使用しているシェルによってそれぞれ異なるコマンド行プロンプトが表示されます。ただし、コマンドは、原則としてこのマニュアルで紹介しているとおりに入力してください。

サードパーティによる関連 Web サイト

このマニュアルでは、関連する追加情報が記載されたサードパーティの URL を参照している箇所があります。

注 Sun は、このマニュアルに記載されているサードパーティ Web サイトの利用可能性について責任を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆる内容、広告、製品、およびその他素材を保証するものではなく、責任または義務を負いません。Sun は、このようなサイトまたはリソースで得られるあらゆるコンテンツ、製品、またはサービスによって生じる、または生じたと主張される、または使用に関連して生じる、または信頼することによって生じる、いかなる損害または損失についても責任または義務を負いません。

関連マニュアル

Calendar Server には、管理者、開発者、およびエンドユーザーを対象としたマニュアルが付属しています。Sun ONE マニュアルの Web サイトでは、このマニュアル以外にも、PDF 形式と HTML 形式の次の Calendar Server マニュアルをご利用頂けます。

- 『Sun ONE Calendar Server リリースノート』
- 『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』
- 『Sun ONE Calendar Server プログラママニュアル』
- 『Sun ONE Messaging and Collaboration スキーマリファレンス』
- 『Sun ONE Messaging and Collaboration イベント通知サービスマニュアル』

これらのマニュアルは、次のマニュアル Web サイトに掲載されています。

http://docs.sun.com/coll/S1_CalendarServer_60

Sun ONE Calendar Express からは、エンドユーザーを対象としたオンラインヘルプをご利用いただけます。

インストールと設定の計画

Solaris システムでの Sun ONE Calendar Server 6.0 のインストールと設定については、Calendar Server のこれまでのリリースと異なる、重要な変更が加えられています。Solaris システムへの Calendar Server 6.0 のインストールには、Sun Java Enterprise System インストーラを使用します。このインストーラは、他の Sun ONE サーバー製品のインストールでも、共通的に使用されます。

Sun ONE Calendar Server 6.0 をインストールして設定するには、次の手順に従います。

1. 18 ページの「Directory Server の設定情報の収集」
2. 20 ページの「Calendar Server 6.0 の設定情報の収集」
3. 24 ページの「Java Enterprise System インストーラを使用した Calendar Server のインストール」
4. 24 ページの「Calendar Server 6.0 の設定」

Calendar Server 6.0 の最新情報については、次のサイトにあります。

http://docs.sun.com/coll/S1_CalendarServer_60

| | |
|---|---|
| 注 | Sun™ ONE または iPlanet™ Calendar Server 5.x をサイトにインストールしてある場合、6.0 リリースへのアップグレードについては、付録 C 「Calendar Server 5.x から 6.0 へのアップグレード / 移行プロセス」を参照してください。 |
|---|---|

Calendar Server 6.0 をアンインストールする必要がある場合は、25 ページの「Calendar Server 6.0 のアンインストール」を参照してください。

Directory Server の設定情報の収集

Directory Server 設定 Perl スクリプト (`comm_dssetup.pl`) を使用すると、Sun ONE Directory Server 5.x を、Calendar Server 6.0 および Messaging Server 6.0 と連動するよう設定できます。`comm_dssetup.pl` を実行するときは、次の情報を指定する必要があります。指定する情報を整理するときは、[81 ページの「Directory Server 設定スクリプトのワークシート」](#)を使用してください。

- Directory Server のルートパス名。デフォルトは `/var/mps/serverroot`
- 複数の Directory Server インスタンスがある場合は、Calendar Server 6.0 で使用するインスタンス
- Directory Manager の識別名 (DN) およびパスワード。デフォルトの DN は、`cn=Directory Manager`
- Directory Server をユーザーとグループに使用するか。つまり、Directory Server に設定データとユーザーデータの両方を格納するか (はい)、または設定データだけを格納するか (いいえ)。デフォルトでは、両方 (はい)
- Directory Server をユーザーとグループに使用する場合は、そのユーザーとグループの root サフィックス。デフォルトは、`o=usergroup`
- 使用する Sun ONE LDAP Schema のバージョン
 - オプション 1 - LDAP Schema バージョン 1 (デフォルト)
 - オプション 1.5 - ONE LDAP Schema バージョン 2 互換モード
 - オプション 2 - LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード詳細については、「[使用するスキーマの決定](#)」を参照
- LDAP Schema バージョン 1 を使用する場合は、DC ツリーの root サフィックス。デフォルトは、`o=internet`
- スキーマを更新するか (はい / いいえ)。デフォルトは「はい」。「はい」の場合は、`config` ディレクトリと、その中にスキーマファイルがある必要がある
- 新しい Directory Server インデックスを設定するか (はい / いいえ)。デフォルトは「はい」。Calendar Server 6.0 では `comm_dssetup.pl` を実行すると、`icsCalendar` および `icsCalendarOwned` 属性にインデックスが追加される
- スキーマファイルが存在するディレクトリへのパス。デフォルトは `./schema`

使用するスキーマの決定

Calendar Server 6.0 では、Sun ONE LDAP Schema バージョン 1 および Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモードをサポートしています。

インストールに使用するスキーマを選択するには、次のガイドラインを参考にしてください。

表 1-1 使用するスキーマの決定

| 状況 | 使用するスキーマ |
|---|--|
| Calendar Server 6.0 を初めてインストールしている | Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード |
| Calendar Server 6.0 と、Sun ONE Portal Server などのその他の Java Enterprise System 製品を統合する | Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード |
| 次の Sun ONE Identity Server 6.1 機能のどれかを使用する <ul style="list-style-type: none"> ドメインやユーザーのプロビジョニング用 CLI ユーティリティ シングルサインオン (SSO) | Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード または互換モード |
| Calendar Server を 5.x から 6.0 にアップグレードしている | Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード または Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 互換モード。 Identity Server 6.1 の機能を使用する場合、あるいは Calendar Server とその他の Java Enterprise System 製品を統合する場合 または Sun ONE LDAP Schema バージョン 1。Identity Server 6.1 の機能を使用しない場合、あるいは Calendar Server とその他の Java Enterprise System 製品を統合しない場合 |
| Calendar Server 6.0 の csdomain ユーティリティを使用してドメインをプロビジョニングする | Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード または互換モード または Sun ONE LDAP Schema バージョン 1。Identity Server 6.1 の機能を使用しない場合、あるいは Calendar Server とその他の Java Enterprise System 製品を統合しない場合 |

表 1-1 使用するスキーマの決定 (続き)

| 状況 | 使用するスキーマ |
|---|--|
| 使用したい別のツールがあるため、Identity Server 6.1 もプロビジョニング用の Calendar Server 6.0 CLI ユーティリティも使用しない | Calendar Server 6.0 インストールには Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 または 既存の Calendar Server には Sun ONE LDAP Schema バージョン 1 またはバージョン 2 互換モード |

Calendar Server 6.0 の設定情報の収集

Calendar Server 6.0 の使用法を設定する前に、次の設定情報を収集しておくことが必要です。

- [管理、ユーザー基本設定、および認証のオプション](#)
- [メールとメールアラームのオプション](#)
- [実行時設定オプション](#)
- [データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリ](#)

Calendar Server の設定プログラムを実行するときは、以上の情報が必要になります。詳細については、第 2 章「[Calendar Server 6.0 の設定](#)」で説明します。いずれにしても、これらの情報は、他のコンポーネント製品との競合 (ポート番号など) を避けるために、Java Enterprise System インストーラの実行前に決定しなければなりません。

設定情報の収集と整理には、付録 A「[設定ワークシート](#)」をお役立てください。

管理、ユーザー基本設定、および認証のオプション

ユーザー基本設定ディレクトリ

Sun ONE Calendar Server では、ユーザーの認証やユーザー設定の格納および検索を行うためにディレクトリサーバーが必要です。

表 1-2 ユーザー基本設定ディレクトリのオプション

| オプション | 説明 |
|-----------------------|---|
| LDAP Server Host Name | ユーザー認証およびユーザー基本設定に使用している LDAP ディレクトリサーバーのホスト名。デフォルトは現在のホスト |
| LDAP サーバーのポート | LDAP ディレクトリサーバーが使用するポート番号。デフォルトは 389 |
| ベース DN | 検索の開始点として使用する LDAP ディレクトリのエントリ。デフォルトは、o=host.com |
| ディレクトリ管理者の DN | ディレクトリサーバーのスキーマで変更を加えられるユーザーの名前。デフォルトは cn=Directory Manager |
| ディレクトリ管理者のパスワード | ディレクトリ管理者の DN に対するパスワード。デフォルトはない |

Calendar Server 管理者

Calendar Server 管理者とは、Calendar Server の管理を実行できるユーザーアカウントのことです。たとえば、このアカウントでは、Calendar Server の起動と停止、カレンダーデータベースのバックアップ、ユーザーの有効化と無効化など、Calendar Server の管理ユーティリティの各種の機能を実行できます。Calendar Server 管理者のユーザーアカウントは、ユーザー認証用の Directory Server に登録されていることが必要です。

表 1-3 Calendar Server 管理者のオプション

| オプション | 説明 |
|------------|---|
| 管理者ユーザー ID | Calendar Server 管理者のユーザー ID。LDAP ディレクトリサーバー上のユーザーでなければならない。デフォルトは、calmaster |
| 管理者パスワード | Calendar Server 管理者のパスワード。デフォルトはない |

メールとメールアラームのオプション

サーバーに問題が生じたときに、メールアラームメッセージを Calendar Server 管理者に送信するように Calendar Server を設定できます。

表 1-4 メールとメールアラームのオプション

| オプション | 説明 |
|-------------|--|
| メールアラーム | メールアラームを有効または無効にする。デフォルトは有効 |
| 管理者のメールアドレス | メールアラームメッセージを受信する Calendar Server 管理者のメールアドレス |
| SMTP ホスト名 | Calendar Server がメールアラームメッセージを送信する SMTP サーバーのホスト名。デフォルトは現在のホスト |

実行時設定オプション

次の Calendar Server 実行時オプションやシステムリソースオプションを設定できます。

表 1-5 実行時設定オプション

| オプション | 説明 |
|------------|---|
| サービスポート | ユーザーに Web (HTTP) アクセスを提供するために Calendar Server が使用する Web ポート番号。デフォルトは 80 |
| 最大セッション数 | 同時に可能な Calendar Server セッションの最大数。デフォルトは 5000 |
| 最大スレッド数 | 同時に可能な Calendar Server スレッドの最大数。デフォルトは 20 |
| サーバープロセス数 | 同時に実行される Calendar Server プロセスの最大数。デフォルトは、Calendar Server をインストールするサーバーの CPU 数 |
| 実行時ユーザー ID | Calendar Server を実行する UNIX ユーザー名。このユーザー名は root 以外にする。アカウントが存在しない場合は、設定プログラムによって作成される。デフォルトは、icsuser |
| 実行時グループ ID | Calendar Server を実行する UNIX グループ。グループが存在しない場合は、設定プログラムによって作成される。デフォルトは、icsgroup |

Calendar Server の起動

Calendar Server を自動起動する次のオプションを設定できます。

表 1-6 Calendar Server の起動オプション

| オプション | 説明 |
|--------------|--|
| 正常インストール後に起動 | Calendar Server を正常インストール後、自動起動するかどうか。デフォルトはチェック済み |
| システム起動時に起動 | システム起動後に Calendar Server を自動起動するかどうか。デフォルトはチェック済み |

データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリ

Calendar Server では情報を生成し、特定のディレクトリにあるカレンダーデータベースファイル、ログファイル、一時ファイルに格納します。

表 1-7 データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのオプション

| オプション | 説明 |
|---------------|--|
| データベースのディレクトリ | Calendar Server がカレンダーデータベース (*.db) ファイルを作成し、格納するディレクトリ。デフォルトは次のとおり var/opt/SUNWics5/csdb |
| ログのディレクトリ | Calendar Server がログファイルを書き込むディレクトリ。デフォルトは次のとおり var/opt/SUNWics5/logs |
| 一時ファイルのディレクトリ | Calendar Server が一時ファイルを書き込むディレクトリ。デフォルトは次のとおり var/opt/SUNWics5/tmp |

Java Enterprise System インストーラを使用した Calendar Server のインストール

Solaris システムでは、Java Enterprise System インストーラは、Calendar Server 6.0 を含む Sun コンポーネント製品パッケージ、および各種製品が使用する共有コンポーネントをインストールします。

Java Enterprise System インストーラでは、Calendar Server 6.0 を次のディレクトリにインストールします。

```
cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal
```

警告 お使いのサイトに Calendar Server の 6.0 より以前のバージョンがインストールされている場合、Java Enterprise System インストーラは、カスタマイズしたファイルを含め、既存の Calendar Server ファイルを上書きします。

XSL、XML、GIF、HTML、設定ファイル (.conf)、タイムゾーンファイルなどのファイルをカスタマイズした場合は、インストーラを実行する前にそれらのファイルをバックアップしてください。

Java Enterprise System インストーラについては、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』を参照してください。

Calendar Server 6.0 の設定

Java Enterprise System インストーラを使用して Calendar Server 6.0 をインストールした場合は、[20 ページの「Calendar Server 6.0 の設定情報の収集」](#)の情報をを使用して、Calendar Server 設定プログラムを実行する必要があります。[付録 A 「設定ワークシート」](#)のワークシートに記入している場合は、記入した情報を使用して設定プログラムに値を入力してください。

設定プログラムについては、[第 2 章「Calendar Server 6.0 の設定」](#)を参照してください。

Calendar Server 6.0 のアンインストール

(その他のコンポーネント製品と同様に) Calendar Server 6.0 をアンインストールするには、Java Enterprise System アンインストーラを使用する必要があります。アンインストーラは次のディレクトリにあります。

```
/var/sadm/prod/entsys/uninstall
```

アンインストーラの実行については、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』を参照してください。

Calendar Server 6.0 をアンインストールすると、すべての Calendar Server プロセスが停止し (実行中の場合)、SUNWics5 および SUNWica5 パッケージが削除されます。

Calendar Server 6.0 だけをアンインストールする場合、インストールされているその他のパッケージまたはコンポーネントは、その他の製品と共有されている可能性があるため、削除されません。

また、アンインストーラは次のディレクトリにログファイルを生成します。

```
/var/sadm/install/logs/
```

ログファイルはたとえば次のようになります。

```
Java_Enterprise_System_uninstall.Btimestamp
```

ここで *timestamp* はアンインストーラを実行したときのタイムスタンプです。

Calendar Server 6.0 の設定

Sun Java Enterprise System インストーラを使用して Sun ONE Calendar Server をインストールした後、次のようにして Calendar Server を設定する必要があります。

1. [Directory Server 設定 Perl スクリプト \(comm_dssetup.pl\)](#) を実行して、Sun ONE Directory Server 5.x を設定する (Messaging Server 6.0 の設定中にスクリプトを実行しなかった場合)
2. [Calendar Server 設定プログラム \(csconfigurator.sh\)](#) を実行して、サイト固有の要件を設定する

Directory Server 設定 Perl スクリプト (comm_dssetup.pl)

Directory Server 設定 Perl スクリプト (comm_dssetup.pl) を使用すると、Sun ONE Directory Server 5.x を、Calendar Server 6.0 および Messaging Server 6.0 と連動するように設定できます。comm_dssetup.pl スクリプトは、新しいスキーマ、インデックス、および設定データを設定して、Directory Server を準備します。この節では、次の項目について説明します。

- [comm_dssetup.pl の機能](#)
- [comm_dssetup.pl を実行するための要件](#)
- [comm_dssetup.pl の実行](#)

注 Sun ONE Messaging Server 6.0 もインストールし、comm_dssetup.pl を実行済みである場合は、このスクリプトをもう一度実行する必要はありません。しかし、新しいバージョンの Messaging Server または Calendar Server をインストールする場合は、新しいバージョンの comm_dssetup.pl を実行してディレクトリサーバースキーマを更新し、新しいインデックスを追加してください。

comm_dssetup.pl の機能

comm_dssetup.pl では特に次のオプションを指定できます。

- Calendar Server 6.0 および Messaging Server 6.0 で使用する Directory Server 5.x のディレクトリパスおよびインスタンス
- ディレクトリ管理者の識別名 (DN) およびパスワード
- Directory Server 5.x をユーザーおよびグループで使用するか。使用する場合、DC ツリーのベースサフィックスおよび組織ツリーのユーザーおよびグループベースサフィックスも指定する必要がある
- Sun ONE LDAP Schema バージョン 1 とバージョン 2 のどちらを使用するか
- DC ツリーのベースサフィックス。LDAP Schema バージョン 1 を選択した場合
- 選択したバージョンに応じて、スキーマを更新するか
- Directory Server インデックスを追加してディレクトリ検索の効率を向上させるか

comm_dssetup.pl を実行するための要件

comm_dssetup.pl を実行するための要件は次のとおりです。

- Sun ONE Directory Server 5.x がインストールされ、設定され、実行されていること
- Directory Server 5.x を実行しているサーバーで comm_dssetup.pl を実行すること
- LDAP Schema バージョン 2 を使用する場合は、Sun ONE Identity Server 6.1 がインストールされ、設定されていること
- comm_dssetup.pl をスーパーユーザー (root) として実行すること
- ディレクトリサーバーが複数のディレクトリインスタンスに分割されている場合は、すべてのインスタンスで comm_dssetup.pl を実行すること

- 複製されたディレクトリサーバーを実行している場合は、マスターディレクトリおよびレプリカ (スレーブ) ディレクトリに対して `comm_dssetup.pl` を実行すること
- Calendar Server 6.0 設定プログラムを実行する前に、`comm_dssetup.pl` を実行すること

comm_dssetup.pl の実行

`comm_dssetup.pl` を実行するには、次の手順に従います。

1. Directory Server 5.x がインストールされているサーバーで、スーパーユーザー (root) としてログインするか、スーパーユーザーになります。
2. 必要に応じて Directory Server 5.x を起動します。
3. Calendar Server 6.0 がこの同じサーバーにインストールされている場合は、`/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリに移動します。

または、Calendar Server 6.0 がこのサーバーにインストールされていない場合は、Messaging Server 6.0 がインストールされているサーバーから `dssetup.zip` ファイルをコピーします (このファイルには `comm_dssetup.pl` スクリプトおよびサポートファイルが含まれている)。

- a. Directory Server 5.x がインストールされているサーバーで、作業用ディレクトリを作成します。例: `var/tmp`
 - b. `msg_svr_base/install/dssetup.zip` ファイルを Messaging Server 6.0 がインストールされているサーバーから作業用ディレクトリにコピーします。
 - c. 作業用ディレクトリで、`dssetup.zip` ファイルを解凍します。
4. `comm_dssetup.pl` スクリプトを **サイレントモード** または **インタラクティブモード** で実行します。Directory Server 5.x に付属されている次の Perl をこのスクリプトの実行に使用することをお勧めします。

```
ds_svr_base/bin/slaped/admin/bin/perl
```

サイレントモード

`comm_dssetup.pl` をサイレントモードで実行するには、次の構文を使用します。表 2-1 で説明している必須の引数をすべて指定する必要があります。

```
perl comm_dssetup.pl
-i yes|no
-c DirectoryServerRoot -d DirectoryInstance
-r DCTreeSuffix -u UserGroupSuffix
-s yes|no -D "DirectoryManagerDN" -w DirectoryManagerPassword
-b yes|no -t 1|1.5|2 -m yes|no
[ -S PathtoSchemaFiles ]
```

表 2-1 Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のオプション

| オプション | 説明 |
|------------------------------------|--|
| -i yes no | 「Do you want to configure new indexes?」に回答する yes - 新しい Directory Server インデックスを追加する。Calendar Server 6.0 では comm_dssetup.pl を実行すると、icsCalendar および icsCalendarOwned 属性にインデックスが追加される no - インデックスを追加しない |
| -c <i>DirectoryServerRoot</i> | Directory Server ルートパス名。 例: /usr/sunone/servers |
| -d <i>DirectoryInstance</i> | Directory Server インスタンスのサブディレクトリ。 例: slapd-varrius |
| -r <i>DCTreeSuffix</i> | DC ツリーのルートサフィックス。例: o=internet |
| -u <i>UserGroupSuffix</i> | ユーザーおよびグループのルートサフィックス。例: o=isp |
| -s yes no | 「Do you want to update the schema?」に回答する yes - スキーマを更新する。スキーマファイルのある config ディレクトリが存在しなければならない no - スキーマを更新しない |
| -D <i>DirectoryManagerDN</i> | Directory Manager の識別名 (DN)。空白文字を含む値が comm_dssetup.pl で正しく解釈されるように、値は二重引用符 (") で囲む必要がある 例: "cn=Directory Manager" |
| -w <i>DirectoryManagerPassword</i> | ディレクトリ管理者 DN のパスワード |

表 2-1 Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のオプション (続き)

| オプション | 説明 |
|-----------------------------|--|
| -b yes no | 「Will this directory server be used for users and groups?」に回答する yes - このディレクトリに設定データとユーザーおよびグループデータの両方を格納する no - このディレクトリに設定データのみ格納する |
| -t 1 1.5 2 | Sun ONE LDAP Schema のバージョン <ul style="list-style-type: none"> • オプション 1 - ONE LDAP Schema バージョン 1 • オプション 1.5 - ONE LDAP Schema バージョン 2 互換モード • オプション 2 - ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード |
| -m yes no | 「Do you want to modify the directory server?」に回答する yes - ユーザーの確認なしで、ディレクトリサーバーを変更する no - ディレクトリサーバーの変更には、ユーザーの確認が必要 |
| -S <i>PathtoSchemaFiles</i> | スキーマファイルの存在するディレクトリへのパス。例: <code>./schema</code> |

例

```
perl comm_dssetup.pl -i yes -c /var/mps/serverroot -d slapd-ketu
-r o=internet -u o=usergroup" -s yes -D "cn=Directory Manager"
-w password -b yes -t 1 -m yes
```

サイレントモードで `comm_dssetup.pl` を実行すると、Directory Server を実際に変更する前に、「[インタラクティブモード](#)」の手順 11. 設定の概要に似た概要が表示されます。

インタラクティブモード

`comm_dssetup.pl` スクリプトをインタラクティブモードで実行するには、あらゆる引数を使用せずに実行し、求められるたびに選択内容を入力します。

1. ようこそ画面と概要

```
# perl comm_dssetup.pl

Welcome to the Directory Server preparation tool for Sun ONE
Messaging Server.
(Version 6.0 Revision 0.004)
This tool prepares your directory server for Sun ONE Messaging
Server install.
The logfile is /var/tmp/dssetup_YYYYMMDDHHSS
Do you want to continue [y]:
```

続ける場合は Enter キーを押し、終了する場合は no と入力して Enter キーを押します。

注 ようこそメッセージは Sun ONE Messaging Server についてだけ言及していますが、comm_dssetup.pl は Sun ONE Calendar Server に対しても適用されます。

2. Directory Server のインストールルート

```
Please enter the full path to the directory where the Sun ONE
Directory Server was installed.
Directory server root [/var/mps/serverroot]
```

Directory Server のインストールルートの位置を指定します。

3. Directory Server インスタンス

```
Please select a directory server instance from the following
list:
[1] slapd-varrius
Which instance do you want [1]:
```


Directory Server インスタンスがサーバーに複数存在する場合は、Calendar Server で使用するよう設定するインスタンスを選択します。

4. ディレクトリ管理者の識別名 (DN)

```
Please enter the directory manager DN [cn=Directory Manager]:  
Password:
```

ディレクトリ管理者 DN (cn=Directory Manager) とは、組織ツリーのユーザーおよびグループデータの管理者です。このスクリプトで指定するディレクトリ管理者 DN は、Directory Server および Calendar Server に設定した DN と同じにしてください。

5. ユーザーおよびグループの Directory Server

```
Will this directory server be used for users/groups [Yes]:
```

「Yes」と答えた場合は、DC ツリーのベースサフィックスおよび組織ツリーのユーザーおよびグループベースサフィックスも指定する必要があります。

「No」と答えた場合は、このディレクトリインスタンスが設定データだけを格納するために使用されると仮定され、スキーマファイルの更新に関する質問に進みます。設定ディレクトリインスタンスに対してこのスクリプトを実行し終わったら、Calendar Server を設定する前に、ユーザーおよびグループデータを格納するディレクトリインスタンスに対してこのスクリプトを実行する必要があります。

6. ユーザーおよびグループのベースサフィックス

```
Please enter the Users/Groups base suffix [o=usergroup]:
```

ユーザーおよびグループのベースサフィックスは、ユーザーおよびグループのエントリのネームスペースを保持する組織ツリーの最上位エントリです。選択したユーザーおよびグループのベースサフィックスは、Directory Server および Calendar Server で指定したベースサフィックスと同じにしてください。

Identity Server をインストールしてある場合は、Identity Server で指定したサフィックスが、この質問で指定するサフィックスと同じであるようにしてください。同じサフィックスを使用しない場合、Calendar Server は Identity Server を認識しません。

7. スキーマタイプ

```
There are 3 possible schema types:
1 - schema 1 for systems with iMS 5.x data
1.5 - schema 2 compatibility for systems with iMS 5.x data that
has been converted with imsdirmig
2 - schema 2 native for systems using Identity Server
Please enter the Schema Type (1, 1.5, 2) [1]:
```

使用するスキーマのバージョンを選択します。

- オプション 1 – Sun ONE LDAP Schema バージョン 1
- オプション 1.5 – Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 互換モード
- オプション 2 – Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード

Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 (オプション 1.5 または 2) を使用する場合は、Sun ONE Identity Server 6.1 がインストールされ、設定されている必要があります。そうでない場合、comm_dssetup.pl は終了します。終了したときは、Identity Server をインストールしてから、このスクリプトをもう一度実行する必要があります。

8. ドメインコンポーネント (DC) ツリーのベースサフィックス

```
Please enter the DC Tree base suffix [o=internet]:
```

手順 7. スキーマタイプでオプション 1 または 1.5 を選択した場合は、DC ツリーのベースサフィックスを指定するようにメッセージが表示されます。オプション 2 を選択した場合は、この質問は表示されません。

DC ツリーはローカル DNS 構造を反映しています。ユーザーおよびグループのデータエントリを含む組織ツリーのインデックスとして、システムによって使用されます。DC ツリーのベースサフィックスは、DC ツリーの最上位エントリの名前です。デフォルト (o=internet) を選択することも、別の名前を選択することもできます。

9. スキーマファイルの更新

```
Do you want to update the schema files [yes]:
```

「Yes」と答えた場合、comm_dssetup.pl では新しい要素をスキーマに追加します。Calendar Server または Messaging Server の新しいバージョンをインストールするたびに、新しいスキーマファイルでディレクトリを更新することをお勧めします。

10. 新しいインデックスの設定

```
Do you want to configure new indexes [yes]:
```

手順 5. ユーザーおよびグループの Directory Server で「Yes」と答えた場合、新しいインデックスを設定するかどうかを確認されます。新しいインデックスを設定すると、ディレクトリ検索のパフォーマンスが向上します。

Calendar Server 6.0 では comm_dssetup.pl を実行すると、icsCalendar および icsCalendarOwned 属性にインデックスが追加されます。「Yes」と答えることをお勧めします。

11. 設定の概要

comm_dssetup.pl で Directory Server 設定を更新する前に、設定内容の概要が表示され、先に進むかどうか確認されます。

```
Here is a summary of the settings that you chose:
Server Root : /var/mps/serverroot/
Server Instance : slapd-varrius
Users/Groups Directory : Yes
Update Schema : yes
Schema Type : 1
DC Root : o=internet
User/Group Root : o=usergroup
Add New Indexes : yes
Schema Directory : ./schema **
Directory Manager DN : cn=Directory Manager
Now ready to generate a shell script and ldif file to modify the
Directory.
No changes to the Directory Server will be made this time.
Do you want to continue [y]:
```

手順 7. スキーマタイプでオプション 2 (Sun ONE LDAP Schema バージョン 2 ネイティブモード) を選択した場合は、DC ルートの値はユーザー / グループルートで入力した値と同じになります。

設定内容を変更する場合は、「No」と入力し、スクリプトを再実行します。

先に進む場合は、comm_dssetup.pl によって、Directory Server インデックスおよびスキーマを更新するための次の LDIF ファイルおよびシェルスクリプトが作成されます。

```
/var/tmp/dssetup_timestamp.ldif  
/var/tmp/dssetup_timestamp.sh
```

ここで comm_dssetup.pl ではもう一度、先に進むか確認されます。

dssetup_timestamp.sh スクリプトを実行する場合は「Yes」、終了する場合は「No」と入力します。終了する場合は、/var/tmp/dssetup_timestamp.sh スクリプトを後で実行する必要があります。

Calendar Server 設定プログラム (csconfigurator.sh)

Calendar Server 6.0 設定プログラム (csconfigurator.sh) では、Calendar Server を設定できます。設定プログラムでは次のディレクトリに新しい ics.conf 設定ファイルを作成します。

```
/etc/opt/SUNWics5/config
```

設定プログラムでは最小限の設定を行います。設定プログラムの実行後、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』で説明するような設定を追加実行する必要がある場合があります。

設定プログラムではグラフィカルユーザーインターフェース (GUI) を使用します。プログラムをリモートで実行する場合は、DISPLAY 環境変数を正しく設定し、サーバーからの X-Windows 接続でコンピュータに表示されるようにする必要があります。たとえば xhost ユーティリティを使用するには、次のコマンドをコンピュータで実行します。xhost +

設定プログラムを実行するには、スーパーユーザー (root) としてログインするかスーパーユーザーになり、/opt/SUNWics5/cal/sbin ディレクトリに移動します。次に、以下のコマンドを発行します。

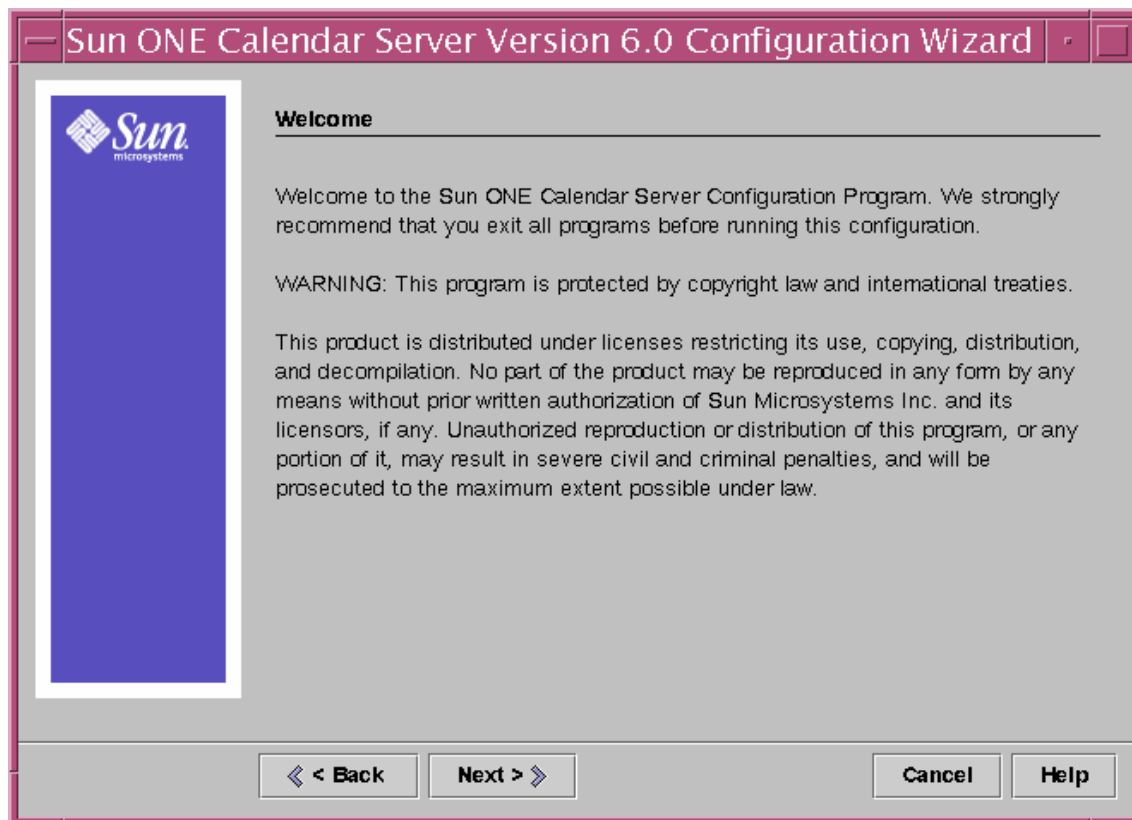
```
# sh ./csconfigurator.sh
```

設定プログラムでは、次の一連のパネルを表示します。

- 「ようこそ」 パネル
- 「Administration, User Preferences and Authentication」 パネル
- 「Email and Email Alarms」 パネル
- 「Runtime Configuration」 パネル
- 「Select Directories」 パネル
- 「Ready to Configure」 パネル
- 「Configuration Summary」 パネル

「ようこそ」パネル

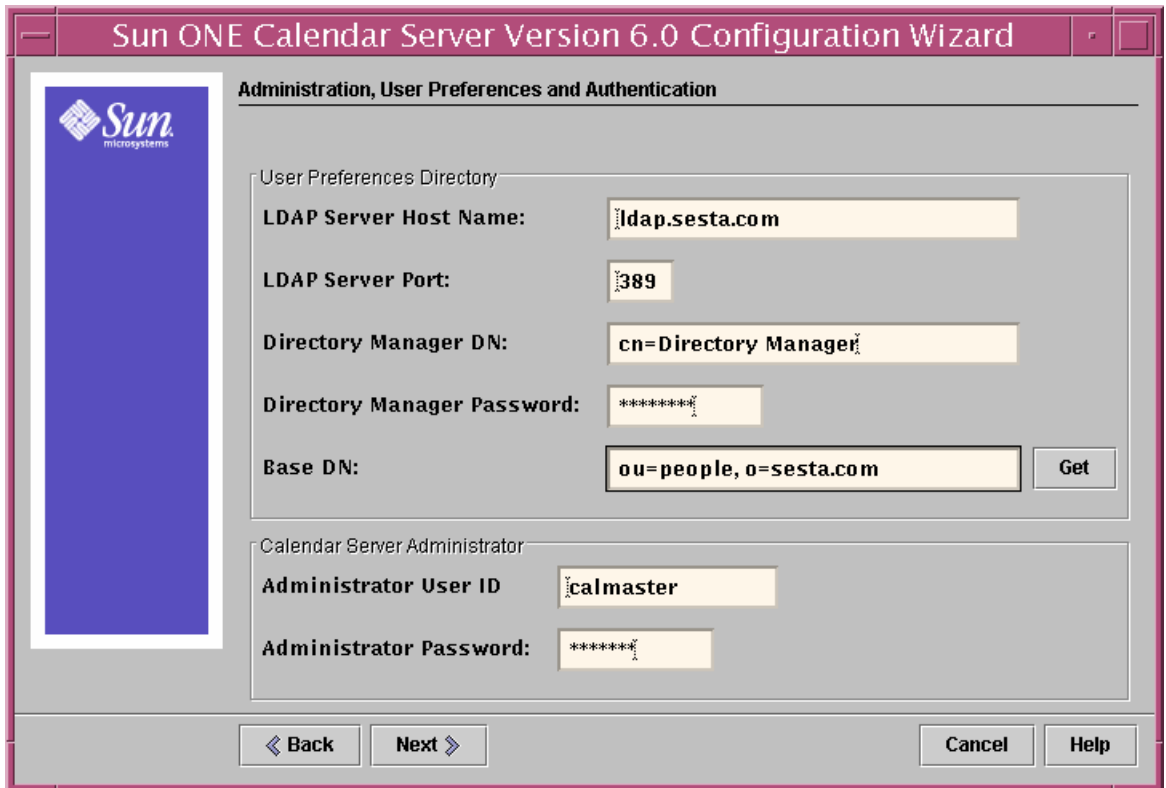
図 2-1 Calendar Server 設定プログラムの「ようこそ」パネル



「Next」をクリックして先に進むか、「Cancel」をクリックして終了します。

「Administration, User Preferences and Authentication」パネル

図 2-2 Calendar Server 設定プログラムの「Administration, User Preferences and Authentication」パネル



The screenshot shows the 'Administration, User Preferences and Authentication' panel of the Sun ONE Calendar Server Version 6.0 Configuration Wizard. The window title is 'Sun ONE Calendar Server Version 6.0 Configuration Wizard'. The panel is divided into two main sections: 'User Preferences Directory' and 'Calendar Server Administrator'. The 'User Preferences Directory' section contains the following fields: 'LDAP Server Host Name' (ldap.sesta.com), 'LDAP Server Port' (389), 'Directory Manager DN' (cn=Directory Manager), 'Directory Manager Password' (masked with asterisks), and 'Base DN' (ou=people, o=sesta.com). A 'Get' button is located to the right of the Base DN field. The 'Calendar Server Administrator' section contains the following fields: 'Administrator User ID' (calmaster) and 'Administrator Password' (masked with asterisks). At the bottom of the panel, there are four buttons: 'Back', 'Next', 'Cancel', and 'Help'.

Sun ONE Calendar Server Version 6.0 Configuration Wizard

Administration, User Preferences and Authentication

User Preferences Directory

LDAP Server Host Name: ldap.sesta.com

LDAP Server Port: 389

Directory Manager DN: cn=Directory Manager

Directory Manager Password: *****

Base DN: ou=people, o=sesta.com **Get**

Calendar Server Administrator

Administrator User ID: calmaster

Administrator Password: *****

Back **Next** **Cancel** **Help**

「User Preferences Directory」のオプション

- 「**LDAP Server Host Name**」- ユーザー認証に使用している LDAP ディレクトリサーバーのホスト名。デフォルト: 現在のホスト
- 「**LDAP Server Port**」- LDAP サーバーが待機するポート番号。デフォルト: 389
- 「**Base DN**」- 検索の開始点として使用する LDAP ディレクトリのエントリ。デフォルト: `o=host.com`

LDAP サーバーのベース DN を返すには、「**Get**」をクリックする

注 「**Get**」をクリックする前に、ディレクトリサーバーに認証を受けるため、ディレクトリ管理者 DN およびパスワードを入力する必要があります

- 「**Directory Manager DN**」- ディレクトリサーバースキーマに変更を加えることができるユーザーの名前。デフォルト: `cn=Directory Manager`
- 「**Directory Manager Password**」- ディレクトリ管理者 DN のパスワード。デフォルト: なし

「Calendar Server Administrator」のオプション

- 「**Administrator User ID**」- Calendar Server 管理者のユーザー ID。LDAP ディレクトリサーバー上のユーザーでなければならない。デフォルト: `calmaster`
- 「**Administrator Password**」- Calendar Server 管理者のパスワード。デフォルト: なし

先に進む場合は「**Next**」、前のパネルに戻るには「**Back**」、終了するには「**Cancel**」をクリックします。

「Email and Email Alarms」 パネル

図 2-3 Calendar Server 設定プログラムの「Email and Email Alarms」 パネル

Sun ONE Calendar Server Version 6.0 Configuration Wizard

Email and Email Alarms

Sun Microsystems

Email Alarms: Disabled Enabled

Administrator Email Address:

SMTP Host Name:

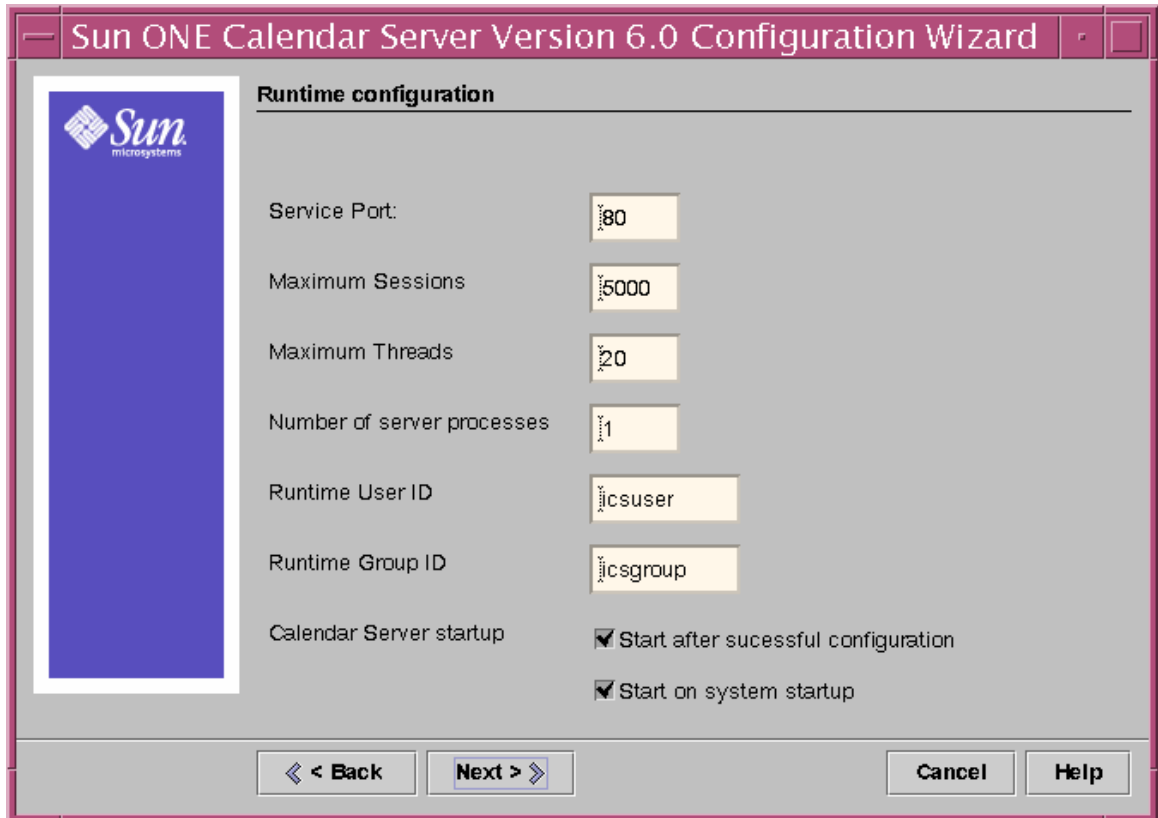
<< Back Next >> Cancel Help

- 「**Email Alarms**」- サーバーに問題がある場合に、Calendar Server 管理者にメールアラームメッセージを送信するかどうかを指定する。デフォルト: 有効
- 「**Administrator Email Address**」- メールアラームメッセージを受信する Calendar Server 管理者のメールアドレス。デフォルト: なし
- 「**SMTP Host Name**」- メールアラームメッセージを送信する SMTP サーバーのホスト名。デフォルト: 現在のホスト

先に進む場合は「**Next**」、前のパネルに戻るには「**Back**」、終了するには「**Cancel**」をクリックします。

「Runtime Configuration」 パネル

図 2-4 Calendar Server 設定プログラムの「Runtime Configuration」 パネル



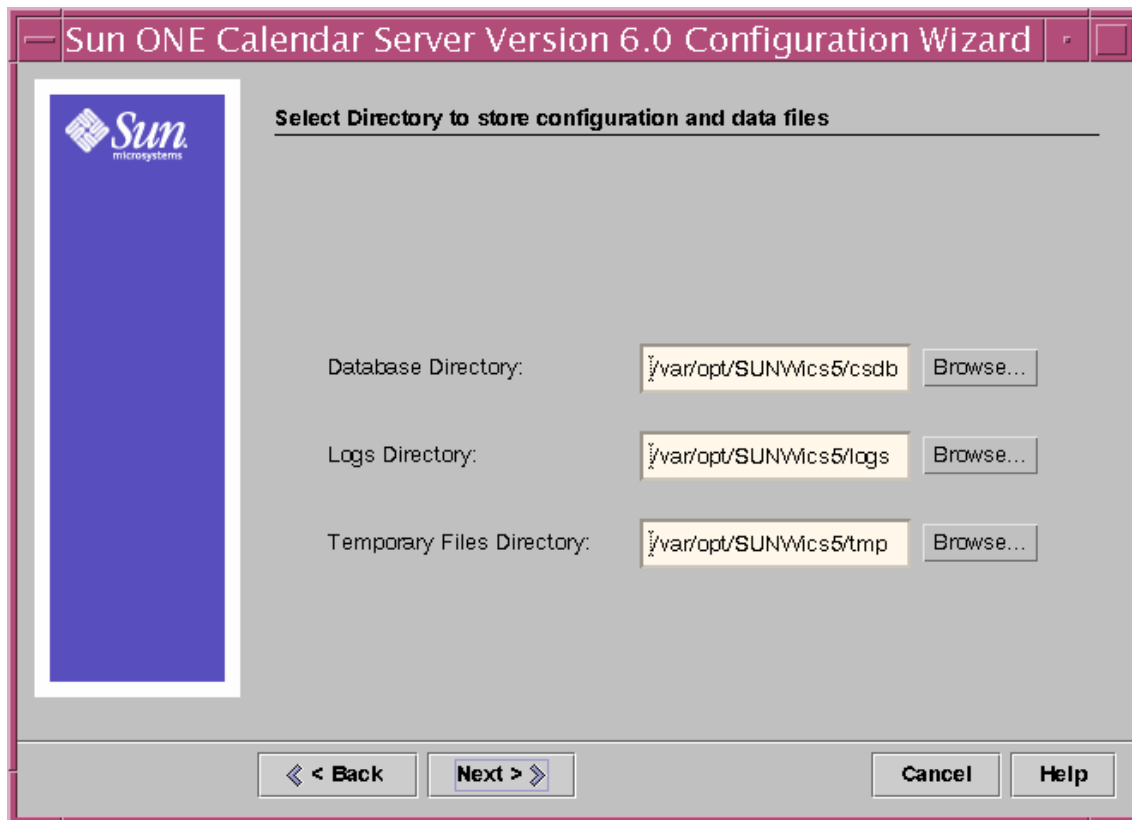
- 「**Service Port**」 – ユーザーに Web (HTTP) アクセスを提供するために Calendar Server が使用する Web ポート番号。デフォルト : 80
- 「**Maximum Sessions**」 – 同時に可能な Calendar Server セッションの最大数。デフォルト : 5000
- 「**Maximum Threads**」 – 同時に可能な Calendar Server スレッドの最大数。デフォルト : 20
- 「**Number of Server Processes**」 – サーバーで実行される Calendar Server プロセスの最大数。デフォルト : Calendar Server をインストールしているサーバーの CPU 数

- 「**Runtime User ID**」 – Calendar Server を実行する UNIX ユーザー名。この名前は root 以外でなければならない。アカウントが存在しない場合は、設定プログラムによって作成される。デフォルト: icsuser
- 「**Runtime Group ID**」 – Calendar Server を実行する UNIX グループ。グループが存在しない場合は、設定プログラムによって作成される。デフォルト: icsgroup
- 「Calendar Server Startup」のオプション
 - 「**Start after successful installation**」 – インストールに成功した後で、Calendar Server を自動的に起動するかどうかを指定する。デフォルト: チェックされている
 - 「**Start on system startup**」 – システムの起動後に、Calendar Server を自動的に起動するかどうかを指定する。デフォルト: チェックされている

先に進む場合は「**Next**」、前のパネルに戻るには「**Back**」、終了するには「**Cancel**」をクリックします。

「Select Directories」 パネル

図 2-5 Calendar Server 設定プログラムの「Select Directories」 パネル

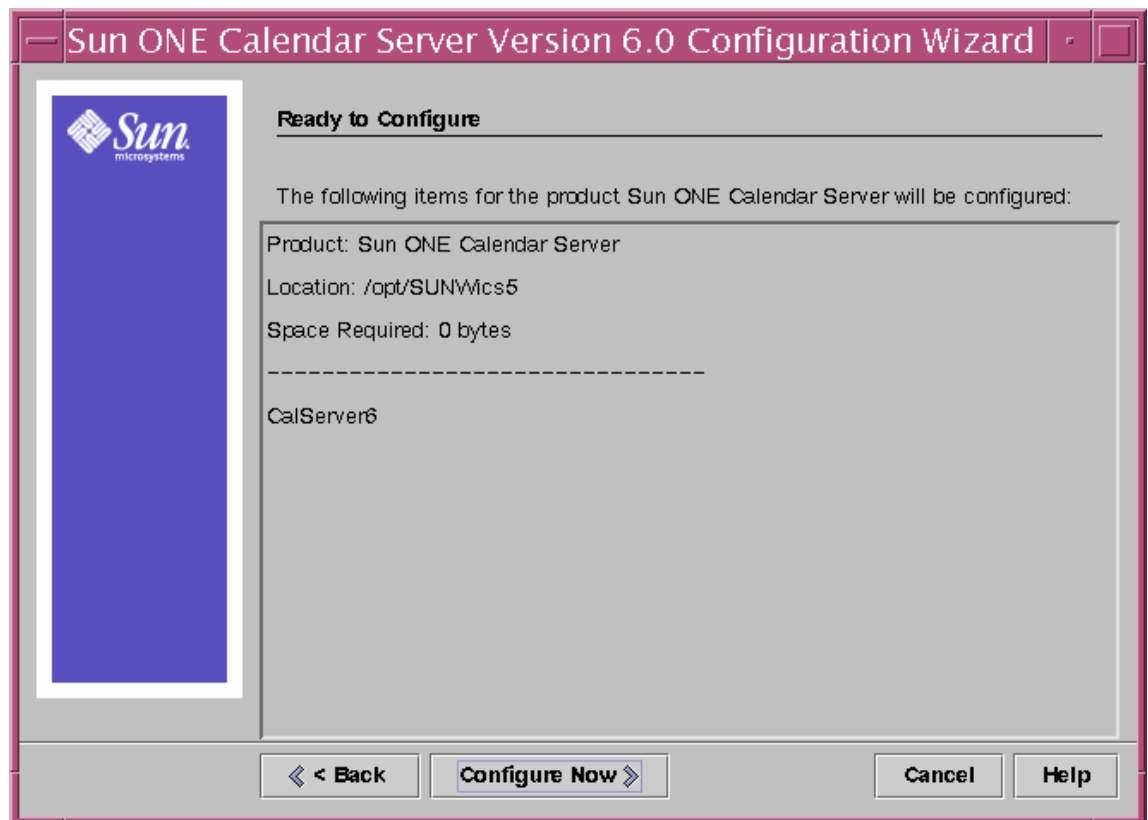


- 「**Database Directory**」 – Calendar Server がカレンダーデータベースファイルを作成し、格納するディレクトリ。デフォルト: /var/opt/SUNWics5/csdb
- 「**Logs Directory**」 – Calendar Server がログファイルを書き込むディレクトリ。デフォルト: /var/opt/SUNWics5/logs
- 「**Temporary Files Directory**」 – Calendar Server が一時ファイルを書き込むディレクトリ。デフォルト: /var/opt/SUNWics5/tmp

各ディレクトリについて、デフォルトのディレクトリを使用するか、別のディレクトリのフルパスを入力するか、あるいは「**Browse...**」をクリックしてディレクトリを選択します。次に、先に進む場合は「**Next**」、前のパネルに戻るには「**Back**」、終了するには「**Cancel**」をクリックします。

「Ready to Configure」 パネル

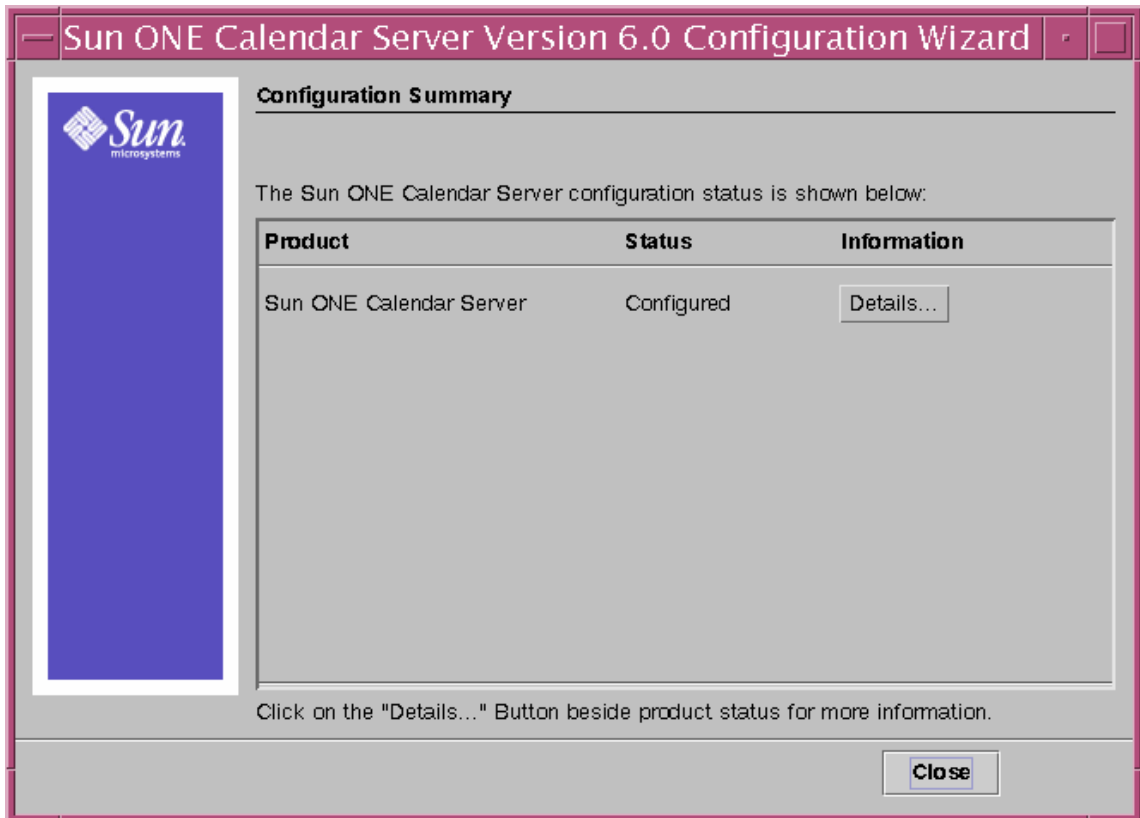
図 2-6 Calendar Server 設定プログラムの「Ready to Configure」パネル



Calendar Server を設定する場合は「**Configure Now**」、前のパネルに戻るには「**Back**」、終了するには「**Cancel**」をクリックします。

「Configuration Summary」パネル

図 2-7 Calendar Server 設定プログラムの「概要」パネル



設定の概要の詳細を表示する場合は「Details...」、設定プログラムを終了する場合は「Close」をクリックします。

Calendar Server データの移行

Sun™ ONE Calendar Server 6.0 には、次の移行ユーティリティがあります。

- **cs5migrate** ユーティリティ – Calendar Server 5.x データベースを Calendar Server 6.0 へ移行し、カレンダーデータベースを Berkeley DB バージョン 2.6 からバージョン 3.2.9 へアップグレードします。
- **csmig** ユーティリティ – カレンダーデータベースの各カレンダーに所有者を割り当て、必要に応じて各カレンダー ID (calid) を所有者にマッピングします。これにより、ホスト (仮想) ドメインおよび LDAP Calendar Lookup Database (CLD) プラグインを使用できます。
- **csvdmig** ユーティリティ – 仮想ドメイン (ホストドメイン) を使用できるように、Calendar Server 6.0 サイトをアップグレードします。
- **ics2migrate** ユーティリティ – iPlanet Calendar Server 2.x からデータを移行します。
- **nsc4migrate** ユーティリティ – Netscape Calendar Server 4.x からデータを移行します。
- **csrename** ユーティリティ – カレンダーデータベースと LDAP ディレクトリサーバー内のカレンダーユーザーの名前を変更します (プレフィックス「ics」が付いた Calendar Server 属性)。

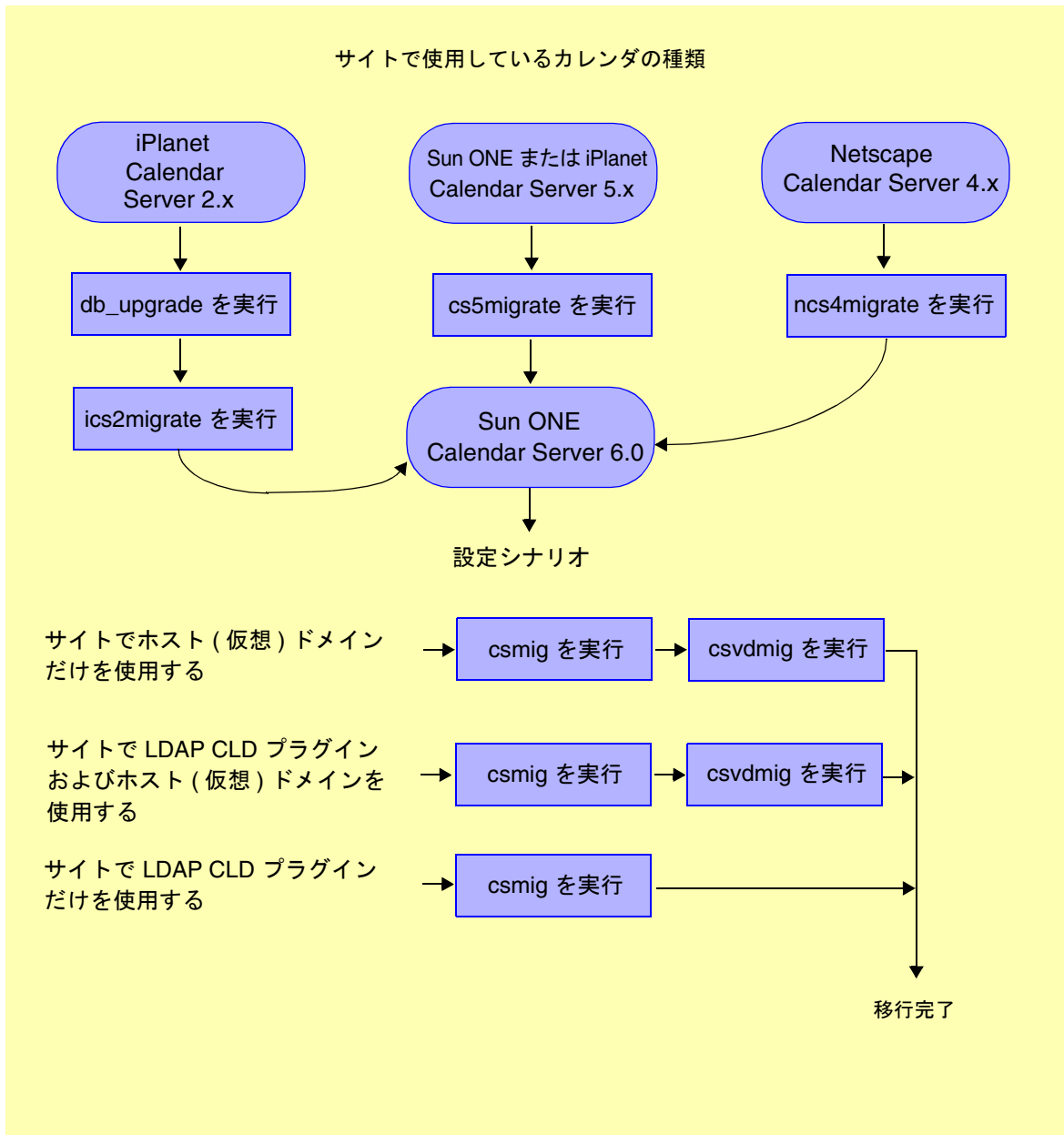
図 3-1 に、Calendar Server 移行ユーティリティの実行フローを示します。

警告

移行ユーティリティを実行する前に、必ずご購入先のテクニカルサポートまたは顧客サービスの担当者にお問い合わせ、お手持ちのユーティリティが最新のバージョンであることを確認してください。

お使いのサイトが Calendar Server の限定仮想ドメインモードまたは複数インスタンスに対応するように設定されている場合は、ご購入先の顧客サービス担当者にお問い合わせ、移行要件の評価を受け、それらの要件をサポートする特定の移行ユーティリティがお手元にあることを確認してください。

図 3-1 Calendar Server 移行ユーティリティの実行フロー



cs5migrate ユーティリティ

Calendar Server 5.x から Calendar Server 6.0 にアップグレードしている場合は、Calendar Server 6.0 の実行前に cs5migrate ユーティリティを実行する必要があります。cs5migrate ユーティリティの機能は次のとおりです。

- 次の Calendar Server 5.x ファイルを Calendar Server 6.0 へ移行する
 - カレンダーデータベースファイル (ics50calprops.db、ics50journals.db、ics50alarms.db、ics50events.db、ics50todos.db、および ics50gse.db)
 - セッションデータベース (session.db)
- カレンダーデータベースを Berkeley DB バージョン 2.6 からバージョン 3.2.9 へアップグレードする
- 移行ステータスを cs5migrate.log に書き込み、あらゆるエラーを cs5migrateError.log および cs5migrateException.log に書き込む

移行の所要時間

cs5migrate による移行にかかる時間は、さまざまな要因で変化します。第 1 に cs5migrate では、スキーマ属性を更新するため、LDAP ディレクトリサーバーにアクセスする必要があります。そのため LDAP サーバーへのネットワーク接続が移行時間に大きく影響します。可能な限り、LDAP サーバーへの高速ネットワーク接続を使用し、その他のネットワークトラフィックが最小のときに cs5migrate を実行してください。

移行シナリオ – Sun Fire™ (UltraSPARC™ III Cu、12 CPU、750MHz、メモリ 12G バイト、浮動小数点プロセッサ付、20G バイトのスワップファイルスペースで Solaris 8 OS を使用) では、次の Calendar Server 5.x カレンダーデータベースを約 1 時間 15 分で移行しました。

- カレンダーデータベースのサイズ: およそ 600M バイト
- カレンダー数: 8726
- イベント数: 272412
- タスク数: 4490
- アラーム数: 13583
- GSE (Group Scheduling Engine) エントリ数: 0

cs5migrate の構文

csmig ユーティリティは、次の構文を使用します。

```
cs5migrate [-q] [-d] [-r] [-l min|max] source-directory target-directory
```

-q を指定すると非出力モードになります。非出力モードでは、エラーが検出された場合にのみ情報が表示されます。移行処理が正常に完了した場合、情報は表示されません。

-d を指定するとドライランモードになります。ドライランモードでは、データの移行やデータベースのアップグレードは行われません。実際に移行を実施したときの cs5migrate の処理内容が報告されるだけです。

-r を指定すると、繰り返し発生するイベントのマスターコンポーネントを作成します。

-l min|max では、ログモードと移行ログ (cs5migrate.log) の詳細レベルを指定します。

注 -t オプションは、現在のリリースでは実装されていません。

source-directory は、Calendar Server 5.x データベースファイルが格納されたディレクトリを指定する必須パラメータです。

target-directory は、新しい Calendar Server 6.0 データベースファイルが作成される既存のディレクトリを指定する必須パラメータです。

重要 cs5migrate の実行前に、*target-directory* を作成する必要があります。

移行プロセス

cs5migrate の実行前に、次の手順に従ってください。

- csbackup、Sun StorEdge Enterprise BackupTM、Legato Networker などのユーティリティを使って、Calendar Server 5.x データベースのバックアップを作成します。
- 移行前に csbd rebuild コマンドを使用してカレンダーデータベースを再構築します。詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』の第 5 章「Calendar Server データベースの管理」を参照してください。
- 必要に応じてアラームを有効にします。アラームを有効にするには、ics.conf ファイル内の caldb.serveralarms パラメータの値を yes に設定します。

- **Calendar Server 5.x** データベースを別のサーバーに移動する必要がある場合、データベースファイル (*.db) がそれほど大きくない場合は、単に新しいサーバーにコピーできます。そうでない場合は、データベースファイルの **tar** ファイルを作成し、その **tar** ファイルを新しいサーバーにコピーして、**untar** を実行します。

次の手順に従って、**cs5migrate** を実行します。

1. **Solaris** またはその他の **UNIX** システムの場合は、**Calendar Server** を実行するユーザー名 (例: **icsuser**) とグループ名 (例: **icsgroup**) を指定してログインします。
2. 必要に応じて **stop-cal** コマンドを使って **Calendar Server** サービスを停止します。
3. 必要に応じて **target-directory** を作成します。**target-directory** は **cs5migrate** の実行前に存在している必要があります。
4. **cs5migrate** を実行します。構文については、「[cs5migrate の構文](#)」を参照してください。

たとえば、**Solaris** システムでは、次を入力します。

```
./cs5migrate -q -l max /var/opt/SUNWics5/csdb511
/var/opt/SUNWics5/csdb60
```

この例では、移行前に **/var/opt/SUNWics5/csdb60** ディレクトリが存在している必要があります。

移行ステータスについては、**cs5migrate.log** ファイルで確認してください。移行中にエラーが発生した場合や、カレンダーデータベースエントリを移行できない場合は、**cs5migrate** によってその旨が **cs5migrateerror.log** に書き込まれます。

5. **cs5migrate** では **ics.conf** ファイルを変更しないため、**cs5migrate** の実行が終了したら、**ics.conf** ファイルの **caldb.berkeleydb.homedir.path** パラメータが移行したデータベースを示している必要があります。
移行したデータベースディレクトリを指すようにパラメータを設定し直すか、移行したデータベースファイルをパラメータが示すディレクトリに移動します。
6. **LDAP** データキャッシュオプション (**local.ldap.cache.enable = "yes"**) または **CLD** キャッシュオプション (**caldb.cld.cache.enable = "yes"**) を使用している場合は、**cs5migrate** の実行後、ターゲットディレクトリに **ldap_cache** および **cld_cache** ディレクトリを作成します。
7. 移行したデータベースファイルのアクセス権を確認します。**cs5migrate** を **icsuser** として実行した場合は、アクセスに問題はありません。スーパーユーザー (**root**) として実行することは推奨されませんが、その場合は、アクセス権を設定し直さなければならないことがあります。
8. **start-cal** コマンドを使用して **Calendar Server** を再起動します。

csmig ユーティリティ

csmig ユーティリティは、カレンダーデータベースの各カレンダーに所有者を割り当て、必要に応じて各カレンダー ID (calid) を所有者にマッピングします。

csmig ユーティリティでは、ホスト (仮想) ドメインおよび LDAP Calendar Lookup Database (CLD) プラグインを使用できます。移行したデータベースのカレンダーは、このプラグインを使用してアクセスできます。LDAP CLD プラグインはカレンダーを多数のバックエンドサーバーに配布することによってカレンダーデータベースの水平方向のスケラビリティを提供します。LDAP CLD プラグインの詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

このマニュアルでは、次のトピックを取り上げます。

- [csmig の機能](#)
- [csmig 要件](#)
- [csmig の構文](#)
- [csmig 移行手順](#)
- [csmig の使用上のヒントおよびトラブルシューティング](#)

csmig の機能

csmig 移行ユーティリティには次の機能があります。

- csmig は、`caldb.berkeleydb.homedir.path` パラメータによって指定された現在のカレンダーデータベース (*.db ファイル) にあるユーザーとリソースカレンダーの両方を指定します。新しい宛先ターゲットデータベースで、csmig は、LDAP CLD プラグインするために必要なカレンダープロパティ (calprops)、イベント、予定 (仕事)、およびグループスケジューリングエンジン (gse) データベースファイル内のエントリを更新します。

csmig は、宛先ターゲットデータベースにだけ書き込み、既存のカレンダーデータベースには書き込みません。

- csmig は、`icsSubscribed`、`icsCalendar`、`icsCalendarOwned`、`icsFreeBusy`、`icsSet`、および `uid` (リソースカレンダー用) など、すべての関連のある LDAP エントリに対して LDAP 属性を更新します。csmig は、LDAP ディレクトリサーバーデータベースの各カレンダーに対して `icsDWPHost` 属性を作成します。`icsDWPHost` は、カレンダーが常駐するバックエンドサーバーのホスト名を指定します。

- csmig は、カレンダーデータベースの各カレンダーに所有者を割り当て、必要に応じて各カレンダー ID (calid) を所有者にマッピングします。すべてのデフォルトの calids は現状のまま維持され、変更は行われません。ほかのカレンダーは次のように割り当てられます。
 - 有効な所有者を持たないユーザーカレンダーは、`-c` オプションによって csmig に移行されたユーザーに所有されます。たとえば、jsmith が所有者を持たない場合、orphan が `-c` オプションとして指定されると、`orphan:jsmith` に変換されます。
 - 所有者を持たないリソースカレンダーは、`-r` オプションによって csmig に移行されたリソースユーザーに所有されます。
 - リソースカレンダーの名前にコロンが含まれている場合は、コロンは下線に変換されます。

たとえば、football という名前のカレンダーで、所有者が bkamdar の場合は、`bkamdar:football` に変換されます。カレンダーが `tchang:soccer` で、所有者が bkamdar の場合は、`bkamdar:tchang_soccer` に変換されます。calid にはコロンは 1 つだけです。auditorium:room1 という名前のリソースカレンダーは、`auditorium_room1` に変換されます。

csmig 要件

csmig を使用する際の要件は次のとおりです。

- カレンダーデータベースは破損がないようにしてください。csdb check コマンドを使用してカレンダーデータベースを検査し、必要に応じて csdb rebuild コマンドを実行してデータベースを再構築します。これらのコマンドの詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。
- 新しい宛先ターゲットデータベース用に十分なディスク容量が必要です。該当する場合には、バックアップデータベースの容量も必要です。
- csmig を実行するには、icsuser (または設定中に指定した Calendar Server 実行時ユーザー ID) としてログインします。csmig をスーパーユーザー (root) として実行すると、移行したファイルのアクセス権を設定し直さなければならないことがあります。

ユーザー設定の変更を格納する LDAP ディレクトリサーバーのカレンダーユーザーの属性を管理する権限も保有する必要があります。

- Calendar Server を停止する必要があります。

csmig の構文

csmig ユーティリティでは、次の構文を使用します。

```
csmig [ -t DestinationDB ] [ -b Backend-DWPHost ]
      [ -o OutputFile ] [ -e ErrorFile ] [ -m MappingFile ]
      -c calendarOwner -r resourceOwner { migrate|dryrun }
```

-t *DestinationDB* は、csmig が生成する宛先ターゲットデータベースを指定します。デフォルトは、MigratedDB です。

-b *Backend-DWPHost* は、DWP バックエンドホストサーバーの名前を指定します。この名前は、ics.conf ファイルに指定された DWP バックエンドホストサーバーと一致している必要があります。

-o *OutputFile* には、発生したすべてのエラーと同様に、画面への csmig 出力を捕らえる、出力ファイルを指定します。デフォルトは、MigrateOut です。

-e *ErrorFile* には、csmig が出力するすべてのエラーと、解決できないデータベースエントリが書き込まれます。データベースエントリが解決されない場合は、宛先データベースには書き込まれません。デフォルトは、MigrateError です。

-m *MappingFile* は、LDAP スキーマのエントリを更新するために要求される変更をリストするドライランモードで生成される出力マッピングファイルです。内容は、次のようになります。

```
Old calid = jsmith New calid = jsmith:basketball
```

マッピングファイルでは LDAP スキーマに望ましい変更がリストされるだけです。csmig ではスキーマに実際の変更を加えません。

移行モードでは、*MappingFile* は使用されません。

-c *calendarOwner* には、所有者のないユーザーカレンダーに付与する所有者名を指定します。

-r *resourceOwner* には、所有者のないリソースカレンダーに付与する所有者名を指定します。

csmig 移行手順

構成内のすべてのサーバーに Calendar Server 6.0 をインストールしてから、csmig を実行して、既存の Calendar Server および LDAP データを新しい Calendar Server 6.0 および LDAP データに移行します。適切に動作するためには、LDAP CLD プラグインが必要です。csmig を使用してカレンダーデータを移行する推奨手順は次のとおりです。

1. **LDAP ディレクトリサーバーの設定** – インデックスを追加すると、LDAP データ上の移行およびカレンダー検索のパフォーマンスが向上します。
2. **テストドライランの実行** – ドライランは、移行時の csmig の実行内容を報告しますが、実データは移行しません。ドライランを行ったあとで、エラーを訂正したり、未解決カレンダーを処理する計画を決定できます。
3. **実働データの移行** – 本番稼働の間、csmig はカレンダーデータベース (.db ファイル) および LDAP データ (ユーザーおよびグループ設定の変更データ) の icsSubscribed、icsCalendar、icsCalendarOwned、icsFreeBusy、icsSet、および uid (リソースカレンダー用) を移行します。移行のあとで、すべてのカレンダーリソースに LDAP エントリが作成されます。

LDAP ディレクトリサーバーの設定

パフォーマンスを向上させるには、次の 2 つの新しいインデックスを slapd.ldbm.conf ファイルに追加します。

- `index icscalendar pres,eq,sub-icsCalendar` 属性を検索するために移行プロセスで使用されます。
- `index icscalendarowned pres,eq,sub-` 移行プロセスには必要ではないが、LDAP CLD プラグインが使用可能な場合に LDAP データ (サブスクリプション操作) 上でカレンダー検索を実行するときに使用されます。

slapd.ldbm.conf ファイルでインデックスを作成することについての詳細は、ディレクトリサーバーに付属のマニュアルを参照してください。

テストドライランの実行

ステージングサーバー上で実行したテストドライランは、何が移行されるのかを報告しますが、実働データベースを実際に移行することはありません。ドライランによって実働データベースを移行する計画を決定することができます。たとえば、所有者を持たない「orphan」カレンダーを処理する方法を決定できます。

csmig を使用してテストドライランを実行するには、次の手順に従います。

1. `icsuser` (または設定中に指定した Calendar Server 実行時ユーザー ID) としてログインします。csmig をスーパーユーザー (`root`) として実行すると、移行したファイルのアクセス権を設定し直さなければならないことがあります。

2. ステージングサーバー上で、必要に応じて **Calendar Server 6.0** をインストールします。
3. カレンダーデータベースのスナップショットをステージングサーバーにコピーします。
4. LDAP サーバーをインストールして実働 LDAP 環境を模倣します。
slapd.ldbm.conf ファイルの新しいインデックスとともに、このサーバー上に LDAP データベースのスナップショットをインストールします。
5. `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリに移動します。
6. 所有者を持たないユーザーカレンダーに多目的の `calid` を作成します。たとえば、Solaris システムでは、次のコマンドは `orphan` の `calid` を使用してユーザーを作成します。

```
./csuser -g orphan -s adminuser -y password -l en -c orphan create orphan
```
7. 必要に応じて、`stop-cal` コマンドを使って **Calendar Server** を停止します。
8. `csdb check` コマンドを実行してデータベースに破損がないかを確認します。破損が検出された場合、`csdb rebuild` を実行してデータベースを再構築します。
9. `dryrun` オプションを使用して `csmig` コマンドを実行します。たとえば、Solaris システムでは、次を入力します。

```
./csmig -b sesta.com -o csmig.out -e csmig.errors -m csmig.map -c orphan -r calmaster dryrun
```

このコマンドを使用すると、`orphan` に所有者のないユーザーカレンダーを割り当て、`calmaster` に所有者のないリソースカレンダーを割り当てます。

出力マッピングファイル (`csmig.map`) を確認します。マッピングファイルには LDAP スキーマのエントリ更新に望ましい変更がリストされています。
10. 出力、マッピング、およびエラーファイルを検査します。検出したすべての LDAP 問題またはエラーを解決します。実際の移行の前に、未解決カレンダーを処理する方法を決定します。次のようないくつかのオプションがあります。
 - 移行の前に、すべての不必要なカレンダーを削除します。
 - すべての未解決カレンダーに所有者を割り当てます。
 - `-c` および `-r` オプションを使って、`csmig` が移行時にカレンダーの所有者を割り当てられるようにします。

11. 実働カレンダーデータベースを実際に移行する前に、ステージングサーバーにカレンダーデータベースを移行することを推奨します。この手順によって、実働データベースを移行する前にデータがどのように移行されるのかを正確に確認し、問題があれば訂正することができます。

たとえば、Solaris システムでは、次のコマンドによってカレンダーデータベースが `/var/opt/SUNWics5/testcsdb/` ディレクトリに移行されます。

```
./csmig -t /var/opt/SUNWics5/testcsdb/ -b sesta.com -o csmig.out
-e csmig.errors -m csmig.map -c orphan -r calmaster migrate
```

12. テスト移行が終了した後、移行したデータベースを `caldb.berkeleydb.homedir.path` パラメータによって指定された `/csdb` ディレクトリにコピーします。あるいは、このパラメータを編集して移行したデータベースの新しい位置を示すように編集します。そのあと、下記のチェックを実行します。
 - 新しいカレンダーデータベースで `csdb check` を実行します。移行したデータベースのイベントおよび予定の数は、移行前の合計と一致する必要があります。
 - `icsCalendarOwned` エントリの検索およびエントリの数がカレンダーの移行前の数と一致することを確認します。
 - **Calendar Express** にログインして移行したデータベースのカレンダーのいくつかを検証します。

テスト移行が成功した場合は、実働データベースを移行する準備ができています。

実働データの移行

`csmig` を使用して実働データベースを移行するには、次の手順に従います。

1. `icsuser` (または設定中に指定した **Calendar Server** 実行時ユーザー ID) としてログインします。`csmig` をスーパーユーザー (`root`) として実行すると、移行したファイルのアクセス権を設定し直さなければならないことがあります。
2. `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリに移動します。
3. 必要に応じて、`stop-cal` コマンドを使って **Calendar Server** を停止します。
4. 次のデータのバックアップを作成します。
 - カレンダーデータベース (`.db` ファイル)。
 - LDAP データ: `slapd` データベースディレクトリおよび LDAP データベース。
 - `ics.conf` ファイル。この手順は実際には必要ありませんが、元の構成に戻す必要がある場合に利用できます。

5. migrate オプションを使用して csmig を実行します。たとえば、Solaris システムでは、次のコマンドで、カレンダーデータベースを /var/opt/SUNWics5/newcsdb/ ディレクトリに移行します。

```
./csmig -t /var/opt/SUNWics5/newcsdb/ -b sesta.com -o csmig.out
-e csmig.errors -m csmig.log -c orphan -r calmaster migrate
```
6. エラーファイルに含まれている、すべての未解決カレンダーを確認のうえ、「[テストドライランの実行](#)」の[手順 10](#)の記述を基にした計画に従って、それらを解決しておきます。
7. 新しい移行したデータベースを caldb.berkeleydb.homedir.path パラメータによって指定された /csdb ディレクトリにコピーします。あるいは、このパラメータを編集して移行したデータベースの新しい位置を示すように編集します。
8. csdb check コマンドを実行して移行したデータベースを検査します。何らかの破損が示された場合は、csdb rebuild を実行してデータベースを再構築します。
9. ics.conf ファイル内の以下の構成パラメータに変更を加えて、LDAP CLD プラグインを有効にします。

- o service.dwp.enable = "yes"
- o service.dwp.port = "9779"
- o csapi.plugin.calendarlookup = "y"
- o csapi.plugin.calendarlookup.name = "*"
 - o caldb.cld.type = "directory"
 - o caldb.dwp.server.default = "default-server-name"
 - o caldb.dwp.server.server-hostname.ip = "server-hostname" (ローカルサーバーを含む各バックエンドサーバーにて)
 - o caldb.cld.cache.enable = "yes" (CLD キャッシュオプションを使用する場合)
 - o caldb.cld.cache.homedir.path は、CLD キャッシュディレクトリの位置を指定します。デフォルトは、`cal_svr_base/var/opt/SUNWics5/csdb/cld_cache` です。

このディレクトリが正確であることを確認するか、あるいは CLD キャッシュを別の位置にする場合は、このパラメータを修正します。

LDAP CLD プラグインに対する構成パラメータの設定の詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

10. start-cal コマンドを使用して Calendar Server を再起動します。
11. Calendar Server にログインし、いくつかの移行したカレンダーを検査することにより、設定が正常に動作していることを検証します。検査中アラームを無効にするには、ics.conf ファイルにある次の各パラメータを「no」に設定します。

- `caldb.serveralarms = "no"`
- `caldb.serveralarms.dispatch = "no"`
- `service.ens.enable = "no"`
- `service.notify.enable = "no"`
- `ine.cancellation.enable = "no"`
- `ine.invitation.enable = "no"`
- `service.admin.alarm = "no"`

csmig の使用上のヒントおよびトラブルシューティング

この節では、csmig の使用上のヒントおよびトラブルシューティングの方法について説明します。

- [csmig ドライランカレンダーの所有者をカレンダーの所有者にしない場合](#)
- [LDAP カレンダー検索が正常に動作しない場合](#)
- [csmig ドライランが重複するカレンダー名を表示する場合](#)
- [複数の orphan カレンダーを個別に所有者に割り当てる方法](#)
- [カレンダーユーザーをほかのバックエンドサーバーに移動する方法](#)

csmig ドライランカレンダーの所有者をカレンダーの所有者にしない場合

たとえば、`tchang:myCalendar` という名前のカレンダーに、カレンダーデータベースで所有者として `jsmith` があり、csmig ドライランがマッピングを `jsmith:tchang_myCalendar` として表示しているとします。このカレンダー名を `tchang:myCalendar` のまま保持し、所有者の割り当てを `tchang` にします。

解決策

移行の前に、`cscal` ユーティリティを使用してカレンダー `tchang:myCalendar` の所有者を `tchang` に変更します。このようにすると、移行の際、このカレンダーは `tchang:myCalendar` にマッピングされ、`tchang` の LDAP エントリに `icsCalendarowned` が追加されます。

LDAP カレンダー検索が正常に動作しない場合

移行のあとで、LDAP カレンダー検索が有効になっているが、カレンダー検索ダイアログボックスはまったく結果を返さないか、部分的な結果だけを返します。

解決策

LDAP カレンダー検索を有効にすると、Calendar Server は (&(objectclass=icscalendaruser)(icscalendarowned=*substr*)) を検索します。

次のフィルタを使用して LDAP データで 2 つの異なる検索を手動で実行して出力を比較します。

- (&(objectclass=icscalendaruser)(icscalendarowned=*substr*)) フィルタを使って LDAP 検索
- (icscalendarowned=*substr*) フィルタを使って LDAP 検索

サーバーは、icsCalendaruser オブジェクトクラスを含むフィルタを使用するため、LDAP サーバーはスキーマ検査が使用不可の状態に配置されいくつかのカレンダーエントリが icsCalendaruser オブジェクトクラスを持たないでプロビジョンされた可能性があります。

csmig ドライランが重複するカレンダー名を表示する場合

csmig ドライランマッピングファイルおよび出力ファイルから、重複するカレンダー名の存在を確認できます。たとえば、元のデータベースでは、jsmith は次のカレンダーを所有します。

- basketball と 5 つのイベント
- jsmith:basketball と 10 のイベント

ドライランの実行により、移行時に 2 つのカレンダーがマージされることがわかります。結果カレンダーは次のように示されます。

- jsmith:basketball および所有者 jsmith と 15 の合計イベント

出力ファイルには次の警告メッセージが含まれます。

```
Error modifying calendar properties, error=2
```

解決策

2 つのカレンダーをマージしない場合は、移行の前に basketball の所有者を jsmith 以外のユーザーに変更します。これにより、2 つの別々のカレンダーのデータ整合性が保たれます。

複数の orphan カレンダーを個別に所有者に割り当てる方法

csmig は、デフォルトで、すべての orphan カレンダーを単一の所有者に割り当てます。しかし、orphan カレンダーを複数の所有者に割り当てたい場合もあります。

解決策

csmig は、コマンド行からはマッピングファイルを受け付けません。ただし、移行の前に、元のデータベースで **orphan** カレンダに所有者を割り当てることができます。すべての **orphan** カレンダのドライランマッピングファイルを検査します。その後、移行の前に **cscal** ユーティリティを使用して **orphan** カレンダに所有者を割り当てます。dryrun モードで再び **csmig** を実行して新しい所有者を検証します。

カレンダーユーザーをほかのバックエンドサーバーに移動する方法
 ユーザーをバックエンドサーバー間で移動する方法は？

解決策

カレンダーユーザーを移動するためには、元のサーバーから各ユーザーカレンダーをエクスポートし、そのカレンダーを新しいサーバーにインポートします。カレンダーを移動させたら、元のサーバーにあるカレンダーを削除できます。ユーザーの移動手順の詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

csvdmig ユーティリティ

csvdmig ユーティリティは、ホスト (仮想) ドメインを使用するサイトの Calendar Server データベースおよび LDAP ディレクトリサーバーデータベースを変更します。csvdmig ユーティリティでは、次のようにドメイン名をユーザー ID に追加します。

- カレンダー ID (calid) の形式を次のように変更します。
`userid[:calendar-name]` から `userid@domain[:calendar-name]`
- アクセス制御リスト (ACL) のアクセス規則を次のように変更します。
`userid` から `userid@domain`
- Calendar Server 属性の LDAP ディレクトリサーバーユーザーエントリを次のように変更します。
`userid[:calendar-name]` から `userid@domain[:calendar-name]`。

警告

csvdmig ユーティリティは、元の場所から別の場所への、実際のデータの移行はしません。このユーティリティは、それぞれ現在の場所にある、カレンダーデータベースと LDAP ディレクトリサーバーを修正します。

したがって、csvdmig の実行に先立ち、Calendar Server データベースと LDAP ディレクトリサーバーデータベースの両者について、バックアップが必要になります。

csvdmig の構文

csvdmig ユーティリティは、次の構文を使用します。

```
csvdmig [-t DestinationDB] [-c ConfigFile] [-e ErrorFile] [-m MappingFile]  
migrate [DB | LDAP]
```

-m *MappingFile* はマッピングファイルを指定する入力パラメータです。デフォルトは、`MigrateMapping` です。

マッピングファイルは、既存のユーザーをそれぞれのドメインにマップする入力テキストファイルです。csvdmig の実行前にマッピングファイルを作成する必要があります。新旧の値の間に空白文字を入れ、1行に1エントリずつ指定してください。次に、例を示します。

```
user1 user1@sesta.com  
user2 user2@siroe.com  
user3 user3@sesta.com  
...  
user-n user-n@siroe.com
```

-c *ConfigFile* は `Calendar Server` の設定ファイルを指定する入力パラメータです。デフォルトは、`ics.conf` ファイルです。

-t *DestinationDB* は、移行後のデータベースの場所を指定する出力パラメータです。デフォルトは、`MigratedDB` です。

-e *ErrorFile* は、解決できないエラーを格納するエラーファイル名を指定する出力パラメータです。デフォルトは、`MigrateError` です。

DB | LDAP では、`Calendar Server` データベース (DB) と LDAP ディレクトリサーバー (LDAP) のどちらを変更するかを指定します。デフォルトはカレンダーデータベース (DB) です。

csvdmig の実行例

- LDAP ディレクトリサーバーのデータを移行します (デフォルト値を使用)。
`csvdmig migrate LDAP`
- Calendar Server データベースを移行します。
`csvdmig -t targetDB -e errorFile -m mappingFile migrate`

ics2migrate ユーティリティ

ics2migrate 移行ユーティリティでは、iPlanet Calendar Server 2.x のカレンダーデータと LDAP ユーザー基本設定を Calendar Server 6.0 に移行できます。

この節では、次の項目について説明します。

- [移行要件](#)
- [移行対象](#)
- [移行プロセス](#)
 1. [2.x カレンダーデータベースのアップグレード](#)
 2. [データの移行](#)
 3. [移行結果のチェック](#)
- [移行例](#)

移行要件

Calendar Server 2.x から 6.0 に移行する際のハードウェアおよびソフトウェア要件は次のとおりです。

- ソースマシンに移行対象の Calendar Server 2.x データが格納されていること。
- 移行データの作成先となるターゲットマシンを用意すること。ターゲットマシンには、Calendar Server 6.0 以上をインストールする必要があります。
- ics2migrate ユーティリティ – 移行する前に、まず Sun テクニカルサポート代理店またはアカウント管理者に、使用しているユーティリティが最新バージョンであることを確認してください。

ソースマシンと移行先マシンは、別々のサーバーであっても同一のサーバーであってもかまいません。サポート対象のプラットフォームについては、『Sun ONE Calendar Server リリースノート』を参照してください。

移行対象

次の表に、Calendar Server 2.x のデータと、ics2migrate を使ってこれらのデータを Calendar Server 6.0 へ移行する方法を説明します。

表 3-1 Calendar Server 2.x のデータの移行

| Calendar Server 2.x のデータ | Calendar Server 6.0 の移行結果 |
|--------------------------|--|
| カレンダープロパティ (calprops) | Calendar Server calprops データベースを更新します。 |
| イベント | Calendar Server events データベースを更新します。 |
| 予定 | Calendar Server todos データベースを更新します。 |
| アラーム | イベントと予定を書き込んで alarms データベースを更新します。 |

次の表に、Calendar Server 2.x LDAP 属性と、ics2migrate を使ってこれらの属性を Calendar Server 6.0 へ移行する方法を説明します。

表 3-2 LDAP 属性の移行

| Calendar Server 2.x LDAP の属性 | Calendar Server 6.0 の LDAP 属性 |
|-----------------------------------|-------------------------------|
| nswcalUser * | icsCalendarUser * |
| nswcalCalID | icsCalendar |
| nswcalExtendedUserPrefs | icsExtendedUserPrefs |
| ceCalList ** | icsSubscribed |
| ceAgendaList ** | icsSet |
| ceDefaultAgenda ** | icsDefaultSet |
| ceDefaultTZID ** | icsTimeZone |
| ceFirstDayWeek ** | icsFirstDay |
| * オブジェクトクラス | |
| ** 元は nswcalExtendedUserPrefs の一部 | |

移行プロセス

ics2migrate の手順は次のとおりです。

- 2.x カレンダーデータベースのアップグレード
- データの移行
- 移行結果のチェック

警告

ics2migrate のインストール前に、csbackup、Sun StorEdge Enterprise Backup™ ソフトウェア、Legato Networker などのユーティリティを使用して、カレンダーデータベースをバックアップしてください。

db_upgrade は、カレントディレクトリ内でデータベースをアップグレードすることから、カレンダーデータベースのバックアップは、とても重要です。アップグレードの実行中に問題が発生した場合、処理中のデータベースが、修復不可能な状況に陥ってしまう可能性があります。

2.x カレンダーデータベースのアップグレード

Calendar Server 6.0 では Sleepycat Software の Berkeley DB バージョン 3.2.9 が必要です。カレンダーデータベースをバージョン 3.2.9 にアップグレードするために、ics2migrate の実行前に Berkeley DB db_recover および db_upgrade ユーティリティを使用する必要があります。Calendar Server 6.0 では、次のディレクトリに Berkeley DB ユーティリティがあります。

```
cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/tools/unsupported/bin
```

Berkeley DB ユーティリティの詳細については、次の Web サイトを参照してください。

<http://www.sleepycat.com/docs/utility/index.html>

データベースをバージョン 3.2.9 にアップグレードするには：

1. Solaris またはその他の UNIX システムの場合は、Calendar Server を実行するユーザー名 (例: icsuser) とグループ名 (例: icsgroup) を指定してログインします。
2. 必要に応じて 2.x Calendar Server を停止します。
3. カレンダー 2.x データベースをバックアップしていない場合は、バックアップします。

4. 次の場所に古い共有ファイル (`__db_name.share`) またはログファイル (`log.*`) があれば、削除します。

```
cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/lib/http
```

```
cal_svr_base/var/opt/SUNWics5/csdb
```

5. `db_upgrade` ユーティリティを実行して、2.x カレンダーデータベースをバージョン 3.2.9 にアップグレードします。カレントディレクトリが 2.x カレンダーデータベースと同じディレクトリでない場合は、`-h` オプションを使用して、データベースファイルの場所を示します。

注 `db_upgrade` はすべての 2.x データベースファイル (`alarms.db`、`calprops.db`、`events.db`、および `todos.db`) で実行する必要があります。また、`db_upgrade` は、Calendar Server を構成するフロントエンド、バックエンドのすべてのサーバー上で実行してください。サーバーがカレンダーデータベースに直接接続されていない場合も、この処理を省略することはできません。

6. データベースファイルのある `csdb` ディレクトリで Calendar Server 2.x の `caldb.conf` ファイルを探し、ファイルの先頭の行を次のように書き換えます。

```
元の値: caldb.version "1.0.0 [BerkeleyDB]"
```

```
新しい値: caldb.version= "1.0.0 [BerkeleyDB]"
```

注: このファイルが `csdb` ディレクトリにない場合は、テキストエディタでファイルを作成し、先頭の行に新しい値を設定してください。

データの移行

次の手順で `ics2migrate` を実行します。

1. `ics2migrate` の存在するディレクトリに移動します。
2. `ics2migrate` の構文の構文を使用して `ics2migrate` を実行します。
3. 移行後、`ics.conf` ファイルの `caldb.berkeleydb.homedir.path` パラメータが移行したデータベースを示していることを確認します。
4. `csdb check` コマンドを実行します。また必要に応じて `csdb rebuild` コマンドを実行して、カレンダーデータベースを再構築します。

`ics2migrate` の構文

Calendar Server 2.x のデータベースと LDAP ユーザー基本設定の両方を移行する場合

```
ics2migrate [-q] [-s def|none] [-f def|none] [-l min|max] source
target
```

Calendar Server 2.x データベースだけを移行する場合

```
ics2migrate [-q] [-m db] [-s def|none] [-f def|none] [-l min|max]
source target
```

LDAP ユーザー基本設定だけを移行する場合

```
ics2migrate [-q] [-m ldap]
```

注 構文を表示するには、オプションを付けずに `ics2migrate` と入力します。

表 3-3 は、`ics2migrate` オプションとその説明の一覧です。

表 3-3 `ics2migrate` オプション

| ics2migrate オプション | 説明 |
|----------------------------|---|
| <code>[-q]</code> | 非出力モードで実行します。移行が成功した場合、 <code>ics2migrate</code> はコンソールに情報を表示しません。移行が失敗した場合、 <code>ics2migrate</code> はエラーだけを表示します。 デフォルトは、冗長モードです。 |
| <code>[-m db ldap]</code> | <code>db</code> - カレンダーデータベースだけを移行します。 <code>ldap</code> - LDAP ユーザー基本設定だけを移行します。 デフォルトでは、カレンダーデータベースと LDAP ユーザー基本設定の両方が移行されます。 |
| <code>[-s def none]</code> | <code>def</code> - ユーザーのデフォルトカレンダーに対してだけスケジュール設定アクセス権を付与します。 <code>none</code> - すべてのユーザーカレンダーに対し、スケジュール設定アクセス権を付与しません。 デフォルトでは、全カレンダーに対するスケジュール設定アクセス権が付与されます。 |

表 3-3 ics2migrate オプション (続き)

| ics2migrate オプション | 説明 |
|-------------------|--|
| [-f def none] | <p>def - ユーザーのデフォルトカレンダーに対してだけ空き時間 / 予定あり設定アクセス権を付与します。</p> <p>none - すべてのユーザーカレンダーの空き時間 / 予定あり設定アクセス権を拒否します。</p> <p>デフォルトでは、全カレンダーに対する空き時間 / 予定あり設定アクセス権が付与されます。</p> |
| [-l min max] | <p>min - データ移行に関する最小限の統計情報を記録します。最小限の統計情報とは、各カレンダーのカレンダー ID、一次所有者、イベントおよび予定の数です。</p> <p>max - データ移行に関する最大限の統計情報を記録します。最大限の統計情報とは、最小限の統計情報に、各イベントと予定の出席者数、各イベントと予定のアラーム数が加わったものです。</p> <p>ics2migrate は、<i>cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin</i> ディレクトリにある <i>ics2migrate.log</i> に統計情報を記録します。</p> <p>デフォルトの場合、ics2migrate は移行統計情報をコンソール上に表示し、ログファイルは生成しません。</p> |
| source | <p>Calendar Server 2.x データベースファイルが格納されているディレクトリ。</p> <p>-m db オプションが指定されている場合、または -m オプションが省略されている場合には、source が必要です。</p> |
| target | <p>Calendar Server 6.0 データベースファイルが格納されているディレクトリ。</p> <p>-m db オプションが指定されている場合、または -m オプションが省略されている場合には、target が必要です。</p> |

移行結果のチェック

移行処理が終了したら、その結果をチェックします。

- ics2migrate.log ファイルに次のメッセージ (移行時の選択内容によって変化) があることを確認します。

```
Database migration successfully completed
LDAP user preference migration successfully completed
```

- データベースが壊れている場合には、csdb ユーティリティの check コマンドを実行してください。

check コマンドは、カレンダーデータベースが壊れていないかをスキャンして調べます。check コマンドで回復不能な不整合が検出された場合、その状況がスキャン結果に報告されます。ここで、必要に応じて csdb ユーティリティの rebuild コマンドを実行することにより、カレンダーデータベース (caldb) を再構築できます。

csdb ユーティリティの check コマンドと rebuild コマンドの詳細については、マニュアル Web サイトの『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

移行例

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方の移行

LDAP ユーザー情報と Calendar Server 2.x データベースの両方を移行します。

Calendar Server 2.x のデータベースは /var/opt/SUNWicsrv/2x_db ディレクトリに、6.0 のデータベースは /var/opt/SUNWics5/50_db ディレクトリに格納されます。

すべてのカレンダーに対する空き時間および予定あり設定アクセス権のスケジュール設定を付与し、ics2migrate.log というログファイルに最小限の統計情報を記録します。

```
ics2migrate /var/opt/SUNWicsrv/2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db -l min
```

非出力モードでの移行

上記の例と同じ移行を非出力モードで行います。ics2migrate は、移行統計情報をコンソール上に表示することもログファイルを生成することも行いません。

```
ics2migrate -q /var/opt/SUNWicsrv/2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db
```

カレンダーデータベースだけの移行

2x_db ディレクトリ (カレントディレクトリに対して相対的) に格納されている 2.x カレンダーデータベースだけを移行し、/var/opt/SUNWics5/50_db ディレクトリに 6.0 データベースを作成します。

```
ics2migrate -m db 2x_db /var/opt/SUNWics5/50_db
```

LDAP ユーザー情報だけの移行

Calendar Server 2.x LDAP ユーザー情報だけをバージョン 6.0 の形式に移行します。

```
ics2migrate -m ldap
```

カレンダーデータベースと LDAP ユーザー情報の両方の移行

LDAP 情報とカレンダーデータベース情報の両方を指定ディレクトリに移行します。各ユーザーのデフォルトカレンダーに対してだけスケジュール設定アクセス権を付与し、サーバー上の全カレンダーに対する空き時間 / 予定あり設定アクセス権を付与せず、統計情報をログファイルに生成することはありません。

```
ics2migrate -s def -f none 2x_db 50_db
```

ncs4migrate ユーティリティ

この節では、ncs4migrate 移行ユーティリティを使用して Netscape Calendar Server 4.x カレンダーデータを Sun ONE Calendar Server へ移行する方法について説明します。

Netscape Calendar Server 4.x カレンダーは、開発元が Corporate Software & Technologies Int. Inc. であることから、CS&T カレンダーとも呼ばれています。

ncs4migrate ユーティリティのコピーが必要な場合は、Sun テクニカルサポート担当者またはお客様窓口まで連絡してください。ncs4migrate を取得したら、それを `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリにコピーします。

この節では、次の項目について説明します。

- [移行要件](#)
- [移行対象](#)
- [移行手順](#)
 1. [Calendar Server 5.0 データベースのバックアップ](#)
 2. [移行準備](#)
 3. [データの移行](#)
 - [複数のノードからのデータの移行](#)
 - [移行ログファイルのチェック](#)
 4. [移行データのチェック](#)

移行要件

移行するには、次のハードウェアとソフトウェアが必要です。

- ソースマシン (1 台または複数台) – Netscape Calendar Server 4.0 (またはそれ以上) の移行対象データが格納されています。
- ターゲットマシン – 移行先である Calendar Server 5.0 データベースが格納されています。Calendar Server 5.0 パッチ 4 (またはそれ以降) を稼動している必要があります。

ソースマシンとターゲットマシンは、別々のサーバーであっても同一のサーバーであってもかまいません。サポート対象のプラットフォームについては、『Sun ONE Calendar Server リリースノート』を参照してください。

移行対象

次の表で、ncs4migrate が Netscape Calendar Server データを Calendar Server 6.0 に移行する方法を示します。

表 3-4 Netscape Calendar Server 4.0 データの移行

| Netscape Calendar Server 4.0 のデータ項目 | Calendar Server 5.0 の移行結果 |
|-------------------------------------|---------------------------|
| 会議、イベント、およびリソースとユーザーに関するメモ | イベントとして移行 |
| 仕事 | todo (タスク) として移行 |

表 3-4 Netscape Calendar Server 4.0 データの移行 (続き)

| Netscape Calendar Server 4.0 のデータ項目 | Calendar Server 5.0 の移行結果 |
|-------------------------------------|--|
| アクセス (セキュリティ) 権限 | <p>移行期間中は無視。指名および指名権は移行されません。</p> <p>ユーザーカレンダーとリソースカレンダーの場合、ncs4migrate は、次のように ics.conf ファイル内のアクセス制御文字列を使用します。</p> <p>ユーザーカレンダーの場合、ncs4migrate は calstore.calendar.default.acl を使用して Calendar Server 5.0 におけるプライバシー設定を次のとおりに設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • Calendar の所有者: 空き時間の確認、スケジュール、読み込み、削除、変更 • その他のすべてのユーザー: 空き時間の確認およびスケジュール <p>リソースカレンダーの場合、ncs4migrate は resource.default.acl を使用して Calendar Server 5.0 におけるプライバシー設定を次のとおりに設定します。</p> <ul style="list-style-type: none"> • リソースの所有者: 空き時間の確認、スケジュール、読み込み、削除、変更 • その他のすべてのユーザー: 空き時間の確認、スケジュール、読み込み <p>プライバシー設定とその変更方法については、Calendar Express のオンラインヘルプを参照してください。</p> <p>注: 移行を開始する前に、ics.conf ファイルに定義されている文字列が次のとおりであることを確認してください。</p> <p>calstore.calendar.default.acl の正しい文字列は、次のとおりです。</p> <pre>@@o^a^r^g;@@o^c^wdeic^g;@^a^sf^g;@^c^^g</pre> <p>resource.default.acl の正しい文字列は、次のとおりです。</p> <pre>@@o^a^r^g;@@o^c^wdeic^g;@^a^rsf^g;@^c^^g</pre> |
| ファイルアタッチメント | <p>移行処理中は無視されます。警告メッセージがログファイルに出力されます。</p> |
| グループ | <p>移行されない</p> |

移行手順

Calendar Server 5.0 データベースのバックアップ

移行処理をはじめる前に、以下の手順を行ってカレンダーデータベースの整合性を確保することをお勧めします。

1. `csbackup`、Sun StorEdge Enterprise BackupTM、Legato Networker などのユーティリティを使って、カレンダーデータベースのバックアップを作成します。
詳細については、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。
2. カレンダーデータベースに対して `csdb` ユーティリティの `check` コマンドを実行し、データベースが壊れていないかどうかをチェックします。`check` コマンドによって破損箇所が検出された場合は、`csdb` ユーティリティの `rebuild` コマンドを実行してデータベースを再構築します。

`csdb` および `csbackup` ユーティリティについては、『Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド』を参照してください。

移行準備

`ncs4migrate` ユーティリティを実行する前に、ターゲットマシン上で以下の手順を実行します。

1. スーパーユーザー (`root`) としてログインするか、システムに対する管理権限を持つユーザーとしてログインします。
2. `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリに移動します。
3. `ncs4dirpaths.dat` というテキストファイルを作成し、Netscape Calendar Server 4.0 データベースを指す完全修飾ディレクトリパスを指定します。たとえば、次のように入力します。

```
/apps/ncs/calendar/unison/db/nodes/N0/perm
```

Netscape Calendar Server 4.0 データベースが入っているディレクトリを検出するには、`unison.dbd` ファイルを検索します。

必要に応じ、`ncs4migrate` がノードにアクセスするために必要な条件を満たしてノードにアクセスし、Netscape Calendar Server 4.0 データベースが入っているディレクトリを読み込みます。

注 \$CAL_HOME などの変数はパス名の中で使用しないでください。変数は、移行処理時に解決されません。

複数のノード上のデータのための ncs4dirpaths.dat ファイルを作成する方法については、「[複数のノードからのデータの移行](#)」を参照してください。

4. 選択したユーザーだけを移行する場合には、同じ `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリ内に `ncs4userfilter.dat` というユーザーフィルタファイルを作成します。`ncs4userfilter.dat` は、移行対象のユーザーを指定するテキストファイルです。次のいずれかの形式で、1 行につき 1 名のユーザーを指定します。
 - Netscape Calendar Server カレンダシステムの `node-number:user id` (`nscalxitemid` 属性)
 - ユーザーの UID 属性

次は、`ncs4userfilter.dat` ファイルのエントリの例です。

```
caluser1
caluser2
10000:00256
10000:00257
```

1 つの `ncs4userfilter.dat` ファイルの中で両方の形式を使用できます。

5. LDAP サーバーが稼動していることを確認してください。
6. 移行処理中にカレンダーデータベースが更新されないようにするため、iPlanet Calendar Server を停止してください。ただし、Netscape Calendar Server は、稼動中でも停止中でもかまいません。

以上で、Netscape Calendar Server 4.0 データの移行準備が完了しました。

データの移行

ターゲットマシン上で、次の手順を行います。

1. スーパーユーザー (root) として、またはシステムに対する管理権限を持つユーザーとしてログインし、必要に応じて `cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリに移動します。
2. コマンド行に `ncs4migrate` と入力します。

`ncs4migrate` ユーティリティにより、[表 3-5](#) に示されたオプションとともに「ようこそ」メニューが表示されます。

注: `ncs4migrate` は、(E)xport および (I)mport オプションを表示しますが、これらのオプションはサポートされていないので使用しないでください。

表 3-5 ncs4migrate ユーティリティオプション

| ncs4migrate オプション | 説明 |
|----------------------------|--|
| (E)xport | Netscape Calendar Server 4.0 を中間ファイルにエクスポートします。 |
| (I)mport | 中間ファイルからカレンダーデータベースにデータをインポートします。 |
| (S)kip | 中間ファイルをスキップします。Netscape Calendar Server 4.0 から Calendar Server 5.0 に一度に 1 レコードずつ移行します。 |
| (L)ogging = ON OFF | ログの設定を行います。ログファイル名は、ncs4migrate_yyyymmdd-hhmmss.log です。デフォルトは ON です。 |
| (V)erbose = ON OFF | 冗長ログを設定します。デフォルトは OFF です。 ディスク容量を節約するため、OFF のままにしておくことをお勧めします。 |
| (D)ebug = ON OFF | デバッグログを設定します。デフォルトは OFF です。 |
| (Q)uiet = ON OFF | 画面出力の設定を行います。デフォルトは OFF です。 |
| (T)erminate = TRUE FALSE | LDAP データベースに含まれていないユーザーが Netscape Calendar Server 4.0 データベース内に存在する場合には終了します。デフォルトは FALSE です。 |
| (O)nly = TRUE FALSE | ユーザーフィルタファイル ncs4userfilter.dat で指定されているユーザーだけを移行します。デフォルトは FALSE です。 O と M が TRUE である場合、ncs4migrate は所有者と出席者のどちらかとしてフィルタファイル中に参加者があるイベントを移行します。イベントは、そのすべての出席者のカレンダーに移行されます。 |
| (M)igrate = TRUE FALSE | ユーザーフィルタファイルに指定されているユーザーを移行します。デフォルトは FALSE です。 |
| (B)ypass = TRUE FALSE | ユーザーフィルタファイルに指定されているユーザーの移行をバイパスします。デフォルトは FALSE です。 |
| (A)ny = TRUE FALSE | どんな組み合わせの Netscape Calendar Server セキュリティアクセスレベルによっても、Calendar Server におけるアクセス権が許可されます。デフォルトは TRUE です。FALSE の場合、3 つのアクセスレベルがすべて存在する必要があります。(H)elp を参照してください。 |
| (U)ser | ユーザーフィルタファイル ncs4userfilter.dat を表示します。フィルタリングの ON OFF を切り替えるには、O オプションを使用します。デフォルトは OFF です。 |
| (P)ath | Netscape Calendar Server 4.0 データベースのパスファイル。ファイル名は、ncs4dirpaths.dat です。 |
| (H)elp | ヘルプ画面を表示します。 |

表 3-5 ncs4migrate ユーティリティオプション (続き)

| ncs4migrate オプション | 説明 |
|-------------------|--------------|
| (E)xit | プログラムを終了します。 |

- ncs4migrate メニューで S オプションを指定すると、全ユーザーが移行されます。ユーザーフィルタファイル (ncs4userfilter.dat) に指定されているユーザーだけを移行する場合には、O オプションを指定します。
- 移行ログファイルを監視して移行ステータスをチェックします。詳細については、「[移行ログファイルのチェック](#)」を参照してください。
- 移行処理が終了したら、移行したカレンダーデータベースを「[移行データのチェック](#)」のとおりチェックします。

複数のノードからのデータの移行

Netscape Calendar Server 4.0 のデータを複数のノードから移行するには、ターゲットマシン上で次の手順を行います。

- スーパーユーザー (root) として、またはシステムに対する管理権限を持つユーザーとしてログインし、各ノードの Netscape Calendar Server 4.0 データベースディレクトリを ncs4migrate の実行場所であるマシンにコピーします。Netscape Calendar Server 4.0 の各ディレクトリには unison.dbd ファイルが入っています。

Netscape Calendar Server 4.0 データを各ノードから直接移行することも可能ですが、そのためには、他のノード上の Netscape Calendar Server 4.0 データに ncs4migrate がアクセスするための要件を、まず最初に満たす必要があります。

- cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin ディレクトリに移動します。
- 全ノードからのデータについて、ディレクトリパス名を ncs4dirpaths.dat ファイルに指定します。たとえば、次の ncs4dirpaths.dat ファイルには、3 つのノードのディレクトリパスが入っています。

```
/apps/ncs/calendar/unison/db/nodes/N0/perm
/apps/ncs/calendar/unison/db/nodes/N1/perm
/apps/ncs/calendar/unison/db/nodes/N2/perm
```

- 移行ユーティリティを実行するには、コマンド行に ncs4migrate と入力します。
- ncs4migrate メニューで S オプションを指定すると、全ユーザーが移行されます。ユーザーフィルタファイル (ncs4userfilter.dat) に指定されているユーザーだけを移行する場合には、O オプションを指定します。
- 移行ログファイルを監視して移行ステータスをチェックします。詳細については、「[移行ログファイルのチェック](#)」を参照してください。

7. 移行処理が終了したら、移行したカレンダーデータベースを「[移行データのチェック](#)」のとおりチェックします。

移行ログファイルのチェック

ncs4migrate ユーティリティは、`cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin` ディレクトリにある次の名前を使用してログファイルを生成します。

```
ncs4migrate_yyyymmdd-hhmmss.log
```

`yyymmdd-hhmmss` は、移行開始時刻を示すタイムスタンプです。

ncs4migrate ユーティリティの実行に時間がかかる場合は、ログファイルのサイズを確認してください。ファイルのサイズが増え続けていけば、ユーティリティはまだ実行中です。

注 ログファイルが大きくなりすぎないようにするには、ncs4migrate の `verbose (V)` オプションを使用してください。

移行データのチェック

移行処理が終了したら、ターゲットマシン上で次の手順を行います。

1. `csdb` ユーティリティの `check` コマンドをカレンダーデータベースに対して実行し、データベースが壊れていないかをチェックします。`check` コマンドによって破損箇所が検出された場合は、`csdb` ユーティリティの `rebuild` コマンドを実行してデータベースを再構築します。

`csdb` ユーティリティの `check` コマンドと `rebuild` コマンドの詳細については、マニュアル Web サイトの『[Sun ONE Calendar Server 管理者ガイド](#)』を参照してください。

2. 必要であれば、Calendar Server を再起動します。

Calendar Express を使用すれば、移行したカレンダーデータベースにアクセスできます。

csrename ユーティリティ

csrename ユーティリティは、カレンダーユーザーの名前を次のように変更します。

- カレンダーデータベースファイル - カレンダーデータベースファイル内のユーザー (ユーザー ID) の名前を変更し、新しいデータベースファイルを生成先ディレクトリに書き込みます。既存のカレンダーデータベースファイルは変更されません。
- LDAP ディレクトリサーバー - **Calendar Server LDAP 属性 (つまり「ics」プレフィックスを持つ属性) のユーザー ID を変換します**。LDAP ディレクトリサーバーは適切に変更されます。

csrename ユーティリティは、次のディレクトリに格納されています。

`cal_svr_base/opt/SUNWics5/cal/sbin`

csrename を実行する前に、次の操作を行います。

- 変換するユーザーの入力マッピングファイルを作成する (-m オプション)
- 必要に応じて LDAP ディレクトリ内の新しいユーザーをプロビジョニングする
- Calendar Server を停止する

csrename を実行するには、icsuser (または設定中に指定した Calendar Server 実行時ユーザー ID) としてログインする必要があります。csrename をスーパーユーザー (root) として実行する場合は、新しいデータベースファイルのアクセス権を設定し直さなければならないことがあります。LDAP ディレクトリサーバー属性を変更するには、そのディレクトリに対して管理権限が必要です。

フロントエンド / バックエンドサーバー設定がある場合は、各バックエンドサーバーで csrename を実行する必要があります。

csrename の構文

csrename を実行するには次の構文を使用します。

```
csrename [-t DestinationDB] [-c ConfigFile] [-e ErrorFile] -m MappingFile
rename [DB|LDAP]
```

-t *DestinationDB* は、変換されたユーザー名で新しいデータベースが生成される生成先ディレクトリを指定します。デフォルトは、MigratedDB です。

csrename の実行後、ics.conf ファイルの caldb.berkeleydb.homedir.path パラメータが生成先データベースを示している必要があります。caldb.berkeleydb.homedir.path が生成先データベースディレクトリを指すように設定し直すか、パラメータが示すディレクトリに生成先データベースファイルを移動してください。

-c *ConfigFile* は Calendar Server の設定ファイルを指定する入力パラメータです。デフォルトは、ics.conf ファイルです。

csrename では設定ファイルの caldb.berkeleydb.homedir.path パラメータを使用して、入力カレンダーデータベースの場所を特定します。カレンダーデータベースのデフォルトの場所は *cal_svr_base*/var/opt/SUNWics5/csdb です。

-e *ErrorFile* は、csrename が解決できないすべてのエラーまたはデータベースエントリを書き込むファイルです。デフォルトは、MigrateError です。

-m *MappingFile* は入力マッピングファイルを指定します。デフォルトは、MigrateMapping です。

入力マッピングファイルは、既存のユーザー ID を新しいユーザー ID にマップするテキストファイルです。

csrename の実行前にマッピングファイルを作成する必要があります。新旧の値の間に空白文字を入れ、1 行に 1 エントリずつ指定してください。たとえば、次のように入力します。

```
tchang tc897675
jsmith js963123
...
bkamdar bk548769
```

DB|LDAP は更新されるデータベースを指定します。

- DB は新しいカレンダーデータベースのユーザー ID のみ変換する (デフォルト)

- LDAP は新しいデータベースと LDAP ディレクトリサーバー属性の両方のユーザー ID を変換する

csrename の例

- マッピングファイル DBMapFile を基にユーザーの名前を変更し、生成先ディレクトリ newcalDB に新しいカレンダーデータベースを作成するには、次のようにします。

```
csrename -t newcalDB -m DBMapFile rename DB
```

- マッピングファイル NewNames の値を基にユーザーの名前を変更し、生成先ディレクトリ NewDB に新しいカレンダーデータベースファイルを作成し、LDAP ディレクトリサーバーの Calendar Server 属性を変更するには、次のようにします。

```
csrename -t NewDB -m NewNames rename LDAP
```


設定ワークシート

この付録には、第 2 章「Calendar Server 6.0 の設定」で説明した Calendar Server 設定プログラムを実行するのに必要となる情報を整理するためのワークシートがあります。

- [Directory Server 設定スクリプトのワークシート](#)
- [Calendar Server 設定ワークシート](#)
 - [「Administration, User Preferences and Authentication」](#) パネルのワークシート
 - [「Email and Email Alarms」](#) のワークシート
 - [「Runtime Configuration」](#) のワークシート
 - データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのワークシート

Directory Server 設定スクリプトのワークシート

表 A-1 Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のワークシート

| オプション | 説明 |
|-----------------------|---|
| -i yes no | 新しい Directory Server インデックスを追加する (yes / no) デフォルト : yes 設定値 : _____ |
| Directory Server Root | Directory Server ルートパス名 デフォルト : /var/mps/serverroot 設定値 : _____ |

表 A-1 Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のワークシート (続き)

| オプション | 説明 |
|-------------------------------|---|
| Directory Server Instance | Directory Server インスタンスのサブディレクトリ デフォルト: なし 設定値: _____ |
| DC Root | DC ツリーのルートサフィックス デフォルト: o=internet 設定値: _____ |
| User and Group Base Suffix | ユーザーおよびグループのルートサフィックス デフォルト: o=usergroup 設定値: _____ |
| -s yes no | スキーマの更新 (yes / no) デフォルト: yes 設定値: _____ |
| Directory Manager DN | Directory Manager の識別名 (DN) デフォルト: "cn=Directory Manager" 設定値: _____ |
| Directory Manager DN Password | ディレクトリ管理者 DN のパスワード デフォルト: なし 設定値: _____ |
| -b yes no | このディレクトリに設定データとユーザーデータの両方を格納するか (yes)、または設定データだけを格納するか (no) デフォルト: yes 設定値: _____ |
| -t 1 1.5 2 | Sun ONE LDAP Schema のバージョン <ul style="list-style-type: none"> • オプション 1 - バージョン 1 • オプション 1.5 - バージョン 2 互換モード • オプション 2 - バージョン 2 ネイティブモード デフォルト: 1 設定値: _____ |

表 A-1 Directory Server 設定スクリプト (comm_dssetup.pl) のワークシート (続き)

| オプション | 説明 |
|---------------------|--|
| -S PathtoSchemaFile | スキーマファイルの存在するディレクトリへのパス デフォルト: ./schema 設定値: _____ |

Calendar Server 設定ワークシート

「Administration, User Preferences and Authentication」パネルのワークシート

表 A-2 「Administration, User Preferences and Authentication」パネルのワークシート

| オプション | 説明 |
|----------------------------|--|
| LDAP Server Host Name | ユーザー認証に使用している LDAP ディレクトリサーバーのホスト名 デフォルト: 現在のホスト 設定値: _____ |
| LDAP Server Port | LDAP サーバーが使用するポート番号 デフォルト: 389 設定値: _____ |
| Base DN | 検索の開始点として使用する LDAP ディレクトリのエントリ デフォルト: o=host.com 設定値: _____ |
| Directory Manager DN | ディレクトリサーバーのスキーマで変更を加えられるユーザーの名前 デフォルト: cn=Directory Manager 設定値: _____ |
| Directory Manager Password | ディレクトリ管理者の DN に対するパスワード デフォルト: なし 設定値: _____ |

表 A-2 「Administration, User Preferences and Authentication」 パネルのワークシート (続き)

| オプション | 説明 |
|------------------------|---|
| Administrator User ID | Calendar Server 管理者のユーザー ID。このユーザーは前述の LDAP ディレクトリ サーバー上のユーザーである必要がある デフォルト: calmaster 設定値: _____ |
| Administrator Password | Calendar Server 管理者のパスワード デフォルト: なし 設定値: _____ |

「Email and Email Alarms」のワークシート

表 A-3 「Email and Email Alarms」のワークシート

| オプション | 説明 |
|-----------------------------|---|
| Email Alarms | サーバーに問題がある場合に、Calendar Server 管理者にメールアラームメッセージを送信するかどうかを指定する デフォルト: 有効 設定値: _____ |
| Administrator Email Address | メールアラームメッセージを受信する Calendar Server 管理者のメールアドレス デフォルト: なし 設定値: _____ |
| SMTP Host Name | メールアラームメッセージが送信される SMTP サーバーのホスト名 デフォルト: 現在のホスト 設定値: _____ |

「Runtime Configuration」のワークシート

表 A-4 「Runtime Configuration」のワークシート

| オプション | 説明 |
|----------------------------|---|
| Service Port | <p>ユーザーに Web (HTTP) アクセスを提供するために Calendar Server が使用する Web ポート番号</p> <p>デフォルト: 80</p> <p>設定値: _____</p> |
| Maximum Sessions | <p>Calendar Server セッションの最大数</p> <p>デフォルト: 5000</p> <p>設定値: _____</p> |
| Maximum Threads | <p>Calendar Server スレッドの最大数</p> <p>デフォルト: 20</p> <p>設定値: _____</p> |
| Number of Server Processes | <p>Calendar Server プロセスの最大数</p> <p>デフォルト: Calendar Server をインストールしているサーバーの CPU 数</p> <p>設定値: _____</p> |
| Runtime User ID | <p>Calendar Server を実行する UNIX ユーザー名</p> <p>デフォルト: icsuser</p> <p>設定値: _____</p> |
| Runtime Group ID | <p>Calendar Server を実行する UNIX グループ</p> <p>デフォルト: icsgroup</p> <p>設定値: _____</p> |
| Calendar Server Startup | <p>Start after successful installation</p> <p>デフォルト: チェックされている</p> <p>設定値: _____</p> |
| | <p>Start on system startup</p> <p>デフォルト: チェックされている</p> <p>設定値: _____</p> |

データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのワークシート

表 A-5 データベース、ログ、および一時ファイルディレクトリのワークシート

| オプション | 説明 |
|---------------------------|--|
| Database Directory | Calendar Server がカレンダーデータベースファイルを作成し、格納するディレクトリ デフォルト : <code>var/opt/SUNWics5/csdb</code> 設定値 : _____ |
| Logs Directory | Calendar Server がログファイルを書き込むディレクトリ デフォルト : <code>var/opt/SUNWics5/logs</code> 設定値 : _____ |
| Temporary Files Directory | Calendar Server が一時ファイルを書き込むディレクトリ デフォルト : <code>var/opt/SUNWics5/tmp</code> 設定値 : _____ |

LDAP Directory Server の考慮事項

Sun™ ONE Calendar Server 6.0 は、カレンダー、カレンダーのプロパティ、アクセス制御情報、イベント、todo (タスク)、アラームの保存と管理を行います。ただし、Calendar Server でユーザー情報の保存を管理するには、ユーザー認証のほかユーザーの基本設定の保存と検索といった処理を行うディレクトリサービスが必要になります。この付録では次の内容を説明します。

- LDAP サーバーのスキーマの手動更新
 - Sun ONE または iPlanet Directory Server
 - Netscape Directory Server
- LDAP スキーマディレクトリで重複する OID の解決

Calendar Server 6.0 でサポートしている LDAP ディレクトリサーバーについては、次の Web サイトの「Calendar Server 6.0 Release Notes」を参照してください。

http://docs.sun.com/coll/S1_CalendarServer_60

LDAP ディレクトリにすでにユーザーが存在している場合、Calendar Server を導入する一番簡単な方法は、ディレクトリサーバーを Sun ONE Directory Server にアップグレードすることです。

ディレクトリサーバーのインストールと構成については、次の URL を参照してください。

http://docs.sun.com/coll/S1_DirectoryServer_52

別のディレクトリサーバーを使用している場合やインストールプログラムでディレクトリサーバーを更新できない場合には、ユーザーが Calendar Server 6.0 にアクセスできるように、スキーマを手動で変更する必要があります。

LDAP サーバーのスキーマの手動更新

一部のインスタンスでは、次のディレクトリサーバーを手作業で更新する必要がある場合があります。

- [Sun ONE または iPlanet Directory Server](#)
- [Netscape Directory Server](#)

Sun ONE または iPlanet Directory Server

Calendar Server によって使用される Sun ONE Directory Server 5.2 および iPlanet Directory Server 5.1 の LDAP スキーマ拡張は、60iplanet-calendar.ldif ファイルに定義されます。

Calendar Server のインストールプログラムは、このファイルを /opt/SUNWics5/cal/config ディレクトリにインストールします。

注 LDAP サーバースキーマを手作業で更新した後で、Calendar Server をアップグレードする場合は、LDAP サーバースキーマをもう一度手作業で更新する必要があります。先にスキーマを手作業で更新した後は、Calendar Server はディレクトリサーバースキーマを自動的に更新できません。

Sun ONE Directory Server または iPlanet Directory Server を手動で更新するには

1. Calendar Server 6.0 をインストールします。
2. Calendar Server が起動している場合は、これを停止します。
3. Directory Server が起動している場合は、これを停止します。
4. ディレクトリサーバーを実行しているサーバー上の次のディレクトリに 60iplanet-calendar.ldif ファイルをコピーします。

```
dir_svr_base/slapd-hostname/config/schema
```

ここで *dir_svr_base* は Directory Server のインストールディレクトリであり、*hostname* でサーバーを指定します。
5. Directory Server を再起動します。OID エラーが発生した場合は、「[LDAP スキーマディレクトリで重複する OID の解決](#)」を参照してください。
6. Calendar Server を再起動します。

Netscape Directory Server

Netscape Directory Server 4.12 または 4.16 では、Calendar Server によって使用される LDAP スキーマ拡張は、次のファイルに定義されます。

- `um50-common-schema.conf` は、Sun ONE 製品群で共有される LDAP 属性およびオブジェクトクラスを定義します。
- `ics50-schema.conf` は、Calendar Server によって使用される LDAP 属性およびオブジェクトクラスを定義します。

これらのファイルは `/opt/SUNWics5/cal/config` ディレクトリにあります。

Netscape Directory Server 4.12 または 4.16 を手作業で更新するには

1. Calendar Server 6.0 をインストールします。
2. LDAP スキーマファイル (`um50-common-schema.conf` および `ics50-schema.conf`) を `/opt/SUNWics5/cal/config` ディレクトリからディレクトリサーバーを実行しているサーバーの次のディレクトリにコピーします。
`server-root/slaped-hostname/config`
`hostname` は、サーバーの名前です。
たとえば、Solaris およびその他の UNIX システムでは、次を入力します。
`/usr/Netscape/Server4/slaped-sesta/config`
3. Calendar Server が起動している場合は、これを停止します。
4. Directory Server が起動している場合は、これを停止します。
5. `ns-schema.conf` ファイルを編集します (このファイルは `um50-common-schema.conf` および `ics50-schema.conf` ファイルをコピーしたディレクトリにある)。ファイルの末尾に、次の記述が含まれていない場合には、ファイルにインクルードされるよう、これらを追加します。

Solaris およびその他の UNIX システムの場合

```
include /netscape/server4/slaped-hostname/config/um50-common-schema.conf
include /netscape/server4/slaped-hostname/config/ics50-schema.conf
```

Windows 2000 システムの場合

```
include "C:\Netscape\Server4\slaped-hostname\config\um50-common-schema.conf"
include "C:\Netscape\Server4\slaped-hostname\config\ics50-schema.conf"
```

ここで `hostname` は、ディレクトリサーバーを実行しているサーバーの名前です。

注 上記に示す順番で行を追加し、`um50-common-schema.conf` が `ics50-schema.conf` の前にインクルードされるようにしてください。

6. Netscape Directory Server を再起動します。OID エラーが発生した場合は、「LDAP スキーマディレクトリで重複する OID の解決」を参照してください。
7. Calendar Server を再起動します。

LDAP スキーマディレクトリで重複する OID の解決

LDAP スキーマディレクトリに重複する OID があると、Directory Server は使用する OID を認識しないで、エラーメッセージを戻します。たとえば、次のメッセージは、iPlanet Directory Server 5.1 について icsCalendarUser オブジェクトクラスの重複する OID を示しています。

```
[24/Jul/2002:23:45:28 -0700] dse - The entry cn=schema in file
/export/iplanet/servers/slapd-ical/config/schema/99user.ldif is
invalid, error code 20 (Type or value exists) - object class
icscalendaruser: The name does not match the OID. Another object
class is already using the name or OID.
```

```
[24/Jul/2002:23:45:28 -0700] dse - Please edit the file to correct
the reported problems and then restart the server.
```

この問題は、Calendar Server 6.0 をインストールする際に、LDAP サーバースキーマ 99user.ldif ファイルを動的に更新した古い Calendar Server リリースが残っている場合に発生します。

OID の重複を解決するには、99user.ldif ファイルを編集して、古い OID を削除する必要があります。Calendar Server 6.0 については、次の表で問題を起こす可能性のある具体的な OID を説明します。

表 B-1 LDAP スキーマディレクトリの Calendar Server OID

| オブジェクトクラス | 古い OID | 新しい OID |
|---------------------|---------------------------|---------------------------|
| icsCalendarUser | 2.16.840.1.113730.3.2.141 | 1.3.6.1.4.1.42.2.27.9.2.2 |
| icsCalendarResource | 2.16.840.1.113730.3.2.143 | 1.3.6.1.4.1.42.2.27.9.2.3 |
| icsCalendarDomain | 2.16.840.1.113730.3.2.144 | 1.3.6.1.4.1.42.2.27.9.2.4 |

99user.ldif ファイルを編集してから Directory Server を再起動します。

Calendar Server 5.x から 6.0 への アップグレード / 移行プロセス

この付録では、Sun™ ONE または iPlanet™ Calendar Server 5.x を Calendar Server 6.0 にアップグレードまたは移行する方法を説明します。次の節で構成されています。

- Calendar Server 6.0 にアップグレードするための [アップグレード / 移行プロセス](#)
- Calendar Server 6.0 XSL ファイルに変更をマージするための [XSL のヒント](#)

アップグレード / 移行プロセス

Calendar Server 6.0 にアップグレードするには

1. Calendar Server 5.x がインストールされているサーバーで、
/opt/SUNWics5/cal/sbin ディレクトリに移動し、Calendar Server 5.x を停止します。

```
./stop-cal
```
2. 次の Calendar Server 5.x ディレクトリおよびファイルをバックアップします。
 - カレンダーデータベースディレクトリ - デフォルトの場所は：
/var/opt/SUNWics5/csdb
 - Calendar Server ログのディレクトリ - デフォルトの場所は：
/var/opt/SUNWics5/logs
 - ics.conf 設定ファイル - デフォルトは：
/opt/SUNWics5/cal/bin/config/ics.conf
3. 次のファイルを含むカスタマイズした Calendar Server 5.x ファイルをバックアップします。

- /opt/SUNWics5/cal/bin/data 内のユーザーインタフェース (UI) XSL ファイル
 - メール形式ファイル - デフォルトの場所は:
/opt/SUNWics5/cal/bin/config/language/
 - default.html ファイル - デフォルトの場所は:
/opt/SUNWics5/cal/bin/html/language/
 - HTML ファイル - たとえば、次のディレクトリ内:
/opt/SUNWics5/cal/bin/html/language/
 - timezones.ics および change_timezone.xml などのタイムゾーンファイル
- language ディレクトリには、使用中の言語に対応したファイルが含まれています。たとえば en - 英語、de - ドイツ語、es - スペイン語、fr - フランス語、ja - 日本語、zh-TW - 繁体字中国語、zh-CN - 簡体字中国語
4. /opt/SUNWics5/cal/ ディレクトリに移動し、Calendar Server 5.x をアンインストールします。スーパーユーザー (root) として実行する必要があります。たとえば、次のように入力します。
./uninst
 5. /opt/SUNWics5 ディレクトリ内のすべてのファイルを削除します。
 6. Java Enterprise System インストーラを実行し、/opt/SUNWics5 ディレクトリの Calendar Server 6.0 をアンインストールします。詳細については、『Sun Java Enterprise System インストールガイド』を参照してください。
 7. /opt/SUNWics5/cal/sbin ディレクトリに移動して comm_dssetup.pl ユーティリティを実行し、Sun ONE Directory Server 5.x を Calendar Server 6.0 で使用できるように設定します。comm_dssetup については、[27 ページの「Directory Server 設定 Perl スクリプト \(comm_dssetup.pl\)」](#)を参照してください。
 8. Calendar Server 6.0 設定プログラム (csconfigurator.sh) を実行し、新しい ics.conf 設定ファイルを作成します。詳細については、[36 ページの「Calendar Server 設定プログラム \(csconfigurator.sh\)」](#)を参照してください。
 9. 5.x の設定を保存しておく場合は、ics.conf ファイルをバックアップ場所からコピーするか、/etc/opt/SUNWics5/config/ics.conf ファイルをテープに保存します。
 10. ics.conf ファイルに UNIX ユーザー ID とグループ ID (デフォルトはそれぞれ icsuser および icsgroup)、およびアクセス権を設定します。たとえば、次のように入力します。

```
chown icsuser:icsgroup /opt/SUNWics5/cal/config/ics.conf
chmod 600 /opt/SUNWics5/cal/config/ics.conf
```
 11. cs5migrate ユーティリティを実行し、Calendar Server 5.x データベースを 6.0 に移行します。詳細については、[49 ページの「cs5migrate ユーティリティ」](#)を参照してください。

12. cs5migrate 移行が正常に終了したら、移行した 6.0 データベースを /var/opt/SUNWics5/csdb ディレクトリにコピーします。/csdb ディレクトリ内のすべてのファイルの所有者が icsuser および icsgroup (または ics.conf ファイルで指定したユーザー ID およびグループ ID) であることを確認してください。
13. Calendar Server 6.0 XSL、XML、HTML、およびメール形式ファイルには、5.x から重大な変更が加えられています。手順 3 で 5.x のファイルを保存している場合は、カスタマイズした変更内容を 5.0 のファイルから 6.0 のファイルに手作業でマージする必要があります。XSL ファイルに変更内容をマージするヒントについては、93 ページの「XSL のヒント」を参照してください。
14. /opt/SUNWics5/cal/sbin ディレクトリに移動し、Calendar Server 6.0 を起動します。
./start-cal
15. Calendar Express を使用して Calendar Server 6.0 にログインし、Calendar Server コンポーネント (イベントおよび todo (タスク)) が表示されることを確認します。

XSL のヒント

Calendar Server 6.0 XSL ファイルに変更内容をマージしている場合は、以下のヒントや指針に従って、よくある間違いを避けるようにしてください。

- 属性にアクセスするときは、誤った構文を使用しないでください。たとえば

```
./element@attribute
```

これは次のようではなければなりません。

```
./element/@attribute
```

アットマーク (@) の前のスラッシュ (/) を忘れないでください。

- ノードの末尾に (/) を付けないでください。たとえば

```
/node1/node2/
```

これは次のようではなりません。

```
node1/node2
```

- 開タグと閉タグが対応するようにしてください。たとえば値に応じてバックグラウンドカラーを変更する場合、さまざまな `<xsl:when>` ステートメントに複数の `<TD bgcolor={$bgcolor_variable}>` を記述し、その最後に 1 つだけ `</TD>` を記述することがあります。

構文解析で開閉タグの対応のエラーが出る場合は、`<TD>` を `<TD>` と記述できます。

その代わりに、次のどちらかの方法を使用してください。

- 新しい変数を定義し、異なる状態に応じてその値を設定します。次に、定義した新しい変数を `<TD>` 行で使用します。
- または、その `<TD>` の `<xsl:attribute>` 属性を使用して `bgcolor` を個別に定義します。

どちらの場合も、`<TD>` 行は 1 つだけになります。一般に、`< TR>` のように要素を水平に並べるタグは使用しないでください。

- タグを閉じるべき位置の前で閉じないでください。たとえば

```
<INPUT type="checkbox" name="ceGroupInviteAll"/>
  <xsl:choose>
    <xsl:when
test="/calendar/usrctx/userprefs@ceGroupInviteAll='0'">
      </xsl:when>
      <xsl:otherwise>
        <xsl:attribute name="checked"/>
      </xsl:otherwise>
    </xsl:choose>
```

この例では、1 行目の末尾にスラッシュがあります。これでは INPUT タグが閉じられてしまうため、ほとんどのパーサーではこれ以降チェックされる属性が無視されてしまいます。この問題を修正するには、1 行目の最後のスラッシュを削除し、終了する場所に `</INPUT>` を記述します。たとえば

```
<INPUT type="checkbox" name="ceGroupInviteAll">
  <xsl:choose>
    <xsl:when
      test="/calendar/usrctx/userprefs@ceGroupInviteAll='0'">
      </xsl:when>
    <xsl:otherwise>
      <xsl:attribute name="checked"/>
    </xsl:otherwise>
  </xsl:choose>
</INPUT>
```

- 宣言していない変数を使用しないでください。変数の使用前に、その変数を宣言していることを確認します。宣言していない変数を見逃すパーサーもありますが、エラーとして通知するパーサーもあります。
- 変数名に空白文字を使用しないでください。たとえば

```
<xsl:variable name="test ">
```

- 同じ名前の変数を複数使用しないでください。異なるレベルで同じ変数を再宣言しないでください。
- `position(.)` を使用しないでください。これは `position()` でなければなりません。
- `"//node"` を使用しないでください。たとえば

```
<xsl:value-of
  select="//panel [@name='weekgrid']/weekcal [1]/weekday [1]/command [
2]"/>
```

二重スラッシュ (`//`) を使用しないでください。

- ` `、`&` などのエンティティを使用しないでください。DOCTYPE 行でエンティティとして宣言されていないとなりません。たとえば

```
<!DOCTYPE xsl:stylesheet [<!ENTITY nbsp " "]>
```

- 16 進数値を使用しないでください。`•` などの値は、DOCTYPE 行でエンティティとして宣言している必要があります。たとえば

```
<!DOCTYPE xsl:stylesheet [<!ENTITY nbsp " "> <!ENTITY bullet
"•"]>
```

`#149` を `xsl` で使用するには、次のように記述します。

```
<xsl:text>&bullet;</xsl:text>
```

- 誤った `stylesheet` タグを使用しないでください。新しく記述する `xsl` ファイルでは、次のように使用します。

```
<xsl:stylesheet xmlns:xsl="http://www.w3.org/1999/XSL/Transform"
version="1.0">
```

- `<xsl text>` 内でコメントを使用しないでください。たとえば

```
<xsl:text><!-- This is a comment --></xsl:text>.
```

`<xsl text>` ノード内でコメントを記述しないでください。

- テンプレートルールで非常に複雑なパターンを使用しないでください。非常に複雑で長いルールではなく、「and」や「or」を使用し、ルール内ではなるべく `<xsl:choose>` を使用するようにして、ルールを単純なものにします。

- 存在の確認のために、数を数えないでください。ノードが存在することを確認する場合は、`count(node)` が 0 よりも大きいことを確認するのではなく、単にノードが存在することを確認します。
- XSLT 関数を使用しすぎないでください。特に頻繁に使用するテンプレートでは、`string-length` などの XSLT 関数の使用を減らすようにしてください。
- `for-each` を使用しないでください。可能な場所では、`for-each` ではなく `apply-templates` をできるだけ使用するようにします。こうすることで、XSLT がより良く、より自然なものになります。
- `[preceding-sibling]` または `[following-sibling]` 軸 (axes) を使用しないでください。
- 1つのテンプレート内で、同じノードを複数回評価しないでください。同じノードを複数回評価する必要がある場合は、1回評価したら、その結果を変数に保存します。
- 条件式では角かっこを使用しないでください。条件式では、`<や>` の代わりに、`<` や `>` を使用します。
- ラジオボタンやチェックボックスでは、`value=""` を使用しないでください。たとえば

```
<xsl:attribute name="checked" value="" />
```

これは次のようであればなりません。

```
<xsl:attribute name="checked" />
```

- 存在しないノードや属性を使用しないでください。たとえば `usrctx` および `intervalMinutes` が `/calendar/usrctx` ノードの下に存在しない場合

```
/usrctx/@intervalMinutes
```

- `xsl` コードを BR の開タグと閉タグの間で使用しないでください。たとえば

```
<BR> <xsl:if>.....</xsl:if></BR>
```

空行の場合は、
 だけを使用してください。

- 大量の空白文字や過度のインデントは使用しないでください。空白文字やインデントを使用すると、xsl は読みやすくなりますが、空白文字によって xsl の動作が変わることがあります。
- i18n.xsl ファイルでは変数を使用しすぎないでください。また、アプリケーション内で使用しない変数を宣言しないでください。

用語集

Berkeley DB 読み取り / 書き込みにおける高度な並行性 (high-concurrency) を実現するトランザクショナルデータベース。高トランザクション処理機能と高回復性を必要とするアプリケーションを対象としています。Calendar Server では、Sleepycat Software Inc. の Berkeley DB にカレンダーデータを格納します。

Calendar Express エンドユーザーが Calendar Server にアクセスするとき使用できる Web ベースのカレンダークライアントプログラム。

Calendar Server API (CSAPI) Calendar Server の機能セットの変更および拡張機能を提供するプログラミングインタフェース。CSAPI モジュールは、Calendar Server の起動時に cal/bin/plugins ディレクトリから読み込まれるプラグインです。

Extensible Markup Language (XML) WWW コンソーシアム (W3C) によって開発された柔軟なプログラミング言語。共通の情報形式を作成できます。これにより、Web、イントラネット、その他のあらゆる場所で、形式およびデータを共有できるようになります。XML が拡張可能であるのは、HTML とは違ってマークアップ記号に制限がなく自己定義性があるためです。Calendar Server は、XML と XSL を使用して Calendar Express ユーザーインタフェースを生成します。

Extensible Style Language (XSL) XML のスタイルシートの作成に使用される言語。XSL は、XML を使用して Web 上に送られるデータがユーザーにどのように表現されるかを記述します。Calendar Server は、XML と XSL を使用して Calendar Express ユーザーインタフェースを生成します。

GMT (グリニッジ標準時間) 英国のグリニッジ子午線の平均太陽時であり、世界中の他のタイムゾーンの基準となる時間標準。GMT は、夏時間による影響を受けません。

Hypertext Transfer Protocol (HTTP) Web 上でのハイパーテキストドキュメントの転送を可能とする標準プロトコル。Calendar Server は、プライマリトランスポートとして HTTP を使用します。

ISO 8601 日付と時間の数値表現を規定する ISO (国際標準化機構) 規格。Calendar Server は、ISO 8601 規格に規定されている表記を使用して日付、時間、継続時間文字列を表現します。

LDAP (Lightweight Directory Access Protocol) Internet Engineering Task Force (IETF) によって定義されたディレクトリサービスプロトコル。ユーザープロファイル、配布リスト、構成データを含む情報の格納、検索、配布に使用されます。

LDAP サーバー LDAP ディレクトリの管理とディレクトリに対するクエリー処理を行うソフトウェアサーバー。Calendar Server は、LDAP サーバーの実装である Sun ONE Directory Server または iPlanet Directory Server を使用します。

SHTML (Server-side Include Hypertext Markup Language) 埋め込みサーバーサイドインクルード (SSI) が組み込まれている HTML ファイル。

todo サーバー側において、行うべきことを指定するカレンダーコンポーネント。クライアント側の Calendar Express では、**仕事**にあたります。

Universal Principle Name (UPN) ログインユーザーを表す値。ユーザーのログイン名と所属ドメインで構成されます。たとえばドメイン `sesta.com` に属するユーザー `bill` の UPN は、`bill@sesta.com` です。

Web カレンダーアクセスプロトコル (WCAP) クライアントが Calendar Server との通信に使用する、高レベルのコマンドベースプロトコル。

Zulu 時間 GMT と UTC (協定世界時) を指す軍用語。

アクセス権 カレンダーに対するアクセスを制御する設定。たとえば、Calendar Express におけるアクセス権は、空き時間の表示、出席依頼、読み込み、削除、修正などです。Calendar Server の管理者は、コマンド行ユーティリティを使って、アクセス制御エントリ (ACE) の文字列としてアクセス権を設定します。「**アクセス制御エントリ (ACE)**」と「**アクセス制御リスト (ACL)**」も参照してください。

アクセス制御エントリ (ACE) カレンダー、カレンダープロパティ、およびカレンダーコンポーネント (イベント、Todo など) のアクセス制御に使用する文字列。たとえば、`jsmith^c^wd^g` などです。

アクセス制御リスト (ACL) カレンダー、カレンダープロパティ、およびカレンダーコンポーネント (イベント、Todo など) のアクセス制御に使用されるアクセス制御エントリの集合。たとえば `@o^a^r^g;@o^c^wdeic^g;@a^sf^g` などです。この ACL は、3 つの ACE をセミコロンで区切った形式になっています。

アラームイベント Calendar Server のイベント通知サービス (ENS) によって生成され送信されるイベント。アラームイベントが発生すると、指定の受信者にメッセージアラームが送信されます。

イベント 日時が関連付けられている、カレンダー内のエントリ。イベントの例としては、カレンダーに新たに追加された会議やアポイントメントが挙げられます。

イベント通知サービス (ENS) サーバーレベルの分類可能なイベントのレポートを受け取り、特定のカテゴリのイベントについて関心があるサーバーとして登録されているサーバーに通知する汎用サービス。

インスタンス 1個または複数のサーバープロセスから成る **Calendar Server** 構成。1台のサーバーに対して複数の **Calendar Server** を構成できます。

カレンダー ID (calid) **Calendar Server** データベース内のカレンダーに関連付けられた一意の識別子。カレンダー ID は、userid[:calendar] の形式をとります。userid はユーザー ID、calendar はカレンダー名です。

カレンダーアクセスプロトコル (CAP) カレンダー操作のための標準インターネットプロトコル。Internet Engineering Task Force (IETF) 規定の要件に基づいています。

カレンダーグループ 複数のカレンダーを簡単に管理できるようにするカレンダーの集合。

カレンダー検索データベース (CLD) 複数のサーバーにカレンダーデータベースが分散されているときに、カレンダーの物理的な位置を調べるプラグイン。**Calendar Server** には、LDAP CLD プラグインおよびアルゴリズム CLD プラグインが用意されています。

カレンダーユーザーエージェント (CUA) カレンダークライアントが **Calendar Server** へのアクセスに使用するアプリケーション。

共通名 (cn) LDAP ディレクトリ内のエントリによって定義されるユーザーまたはオブジェクトを識別する属性。

グループ ID (GID) UNIX システムにおける **Calendar Server** ファイル用のグループ (counters、logs など)。GID は、ics.conf ファイル内の local.servergid パラメータに格納されます。

グループスケジューリングエンジン (GSE) グループスケジューリングを処理する **Calendar Server** プロセス。GSE により、ユーザーは自分と同じサーバー上にいる他のカレンダーユーザー、あるいは別のサーバー上にいる他のカレンダーユーザーとの間で、イベントのスケジューリングを行うことができます。これに対し、他のユーザーは、イベントの修正、イベントのキャンセル、またはイベントへの応答を行うことができます。

高可用性 (HA) Solaris サーバーを 2 台用意し、ハードウェア (ディスク、サーバー、またはネットワーク) やソフトウェアでシングルポイント障害が発生しても、どちらか 1 台の **Calendar Server** を利用できるようにする構成。

コンポーネントの状態 会議などのカレンダーイベントを記述する属性の集合。WCAP で compstate パラメータを使用すると、fetch コマンドはコンポーネントの状態別にイベントを返します。たとえば、REPLY-DECLINED (出席予定者が会議への出席を拒否した)、REQUEST_NEEDS-ACTION (出席予定者が会議への出欠をまだ決定していない) などの compstate が考えられます。

サーバールート サーバー上の他のファイルに対する相対的なディレクトリ位置。たとえば、Solaris システムにインストールされた Calendar Server は、デフォルト時、サーバールートとしてパス /opt/SUNWics5/cal/ を使用します。

サービス システムを構成するコンポーネントの 1 つ。Calendar Server には、次のサービスがあります。管理サービス (csadmind)、HTTP サービス (cshttpd)、通知サービス (csnotifyd)、イベント通知サービス (enpd)、および分散データベースサービス (csdwpd)。

識別名 (DN) ユーザー、システム、または組織を一意に識別する文字列。DN は、検索の実行元である LDAP ディレクトリ内のエントリを識別します。検索ベースとも呼ばれます。たとえば、ou=people,o=sesta.com などです。

仕事 クライアント側の Calendar Express において、行うべきことを指定するカレンダーコンポーネント。サーバー側では、仕事のことを **todo** とも呼びます。

シングルサインオン (SSO) ユーザーがいったんログインすれば複数のアプリケーションにアクセスできるようにする認証メカニズム。これらのアプリケーションは、権限の検証として互いの cookie を交換する信頼サークルを形成するので、アプリケーションごとにログインする手間が省けます。

水平方向のスケラビリティ 単一のサーバー上で実行できる Calendar Server 機能。さまざまな構成オプションを使用して、複数のサーバーに分散されたプロセスの集合として実行することもできます。

タイムゾーン 同じ時間を使用する地域。-12 から +12 まで (GMT は 0)、25 種類の時間 (hour) 単位タイムゾーンがあります。各タイムゾーンは、GMT を基準としています。ほとんどのタイムゾーンには、3 文字の略語によるローカライズ指定がついています。Calendar Server では、America/Los_Angeles や Asia/Calcutta といったタイムゾーン ID (TZID) によってもタイムゾーンを識別します。

通知 イベントを記述するメッセージ。Calendar Server における通知例の 1 つとして、予定されている会議についてのアラームがあります。

通知サービス 他のサーバーから購読や通知を受信し、特定の購読者に通知を渡します。Calendar Server の csnotifyd サービスは、イベントブローカとしてイベント通知サービス (ENS) を使用してイベントと todo (タスク) の通知を送信します。

データベースワイヤプロトコル (DWP) Calendar Server 専用プロトコルの 1 つ。単一の Calendar Server システムに複数のサーバーをリンクすることにより、分散カレンダーストアを形成することができます。Calendar Server は、DWP を使って、カレンダーデータベースに格納されているリモートデータを検索します。

ディレクトリサービス その他のサーバーで使用するディレクトリ情報を格納した中央リポジトリ。Calendar Server を使用するには、LDAP サーバーなどのディレクトリサーバーにカレンダーユーザーを格納する必要があります。Calendar Server は、このディレクトリサーバーを使用して、ユーザーの認証やユーザー設定の格納および検索を行います。「[LDAP \(Lightweight Directory Access Protocol\)](#)」も参照してください。

デフォルトカレンダー Calendar Express にログインしたときに最初に表示されるカレンダー。通常、デフォルトカレンダーのカレンダー ID は、ユーザーのユーザー ID と同じです。たとえば、wchang@sesta.com のデフォルトカレンダーは wchang です。

認証 ユーザーの検証。通常は、ユーザー ID と対応するパスワードを使って行われます。ユーザー本人であればパスワードを知っているという前提に基づいています。Calendar Server のユーザー認証には、LDAP サーバーなどのディレクトリサービスが必要です。

プラグイン 読み込み後、システムの一部として使用できるアクセサリプログラム。たとえば、Calendar Server は、プラグインを使用することによって LDAP 以外のディレクトリサービスにアクセスできます。

ベース DN LDAP ディレクトリ内の検索の開始点として使用される識別名 (ID)。検索ベースとも呼ばれます。たとえば、ou=people,o=sesta.com などです。

ユーザー ID (UID) システムにユーザーを認識させるための一意の文字列。Calendar Server は、各ユーザーをユーザー ID によって識別します。

リソースカレンダー 特定のリソースや機器 (会議室、ノート型コンピュータ、OHP など) に関連付けられたカレンダー。

数字

60iplanet-calendar.ldif ファイル, 88

B

Berkeley DB, 99

C

caldb.cld.cache.enable パラメータ, 58
caldb.cld.cache.homedir.path パラメータ, 58
caldb.cld.type パラメータ, 58
caldb.dwp.server.default パラメータ, 58
caldb.dwp.server.server-hostname.ip パラメータ,
58
caldb.serveralarms.dispatch パラメータ, 59
caldb.serveralarms パラメータ, 59
Calendar Express, 99
Calendar Server 5.x のアップグレード, 19
Calendar Server、アンインストール, 25
Calendar Server、インストール, 24
Calendar Server 設定プログラム, 36
Calendar Server 設定ワークシート, 83
Calendar Server のアンインストール, 25
Calendar Server のインストール, 24

check コマンド, 73
CLI ユーティリティ、Identity Server, 19
comm_dssetup.pl スクリプト, 27
csapi.plugin.calendarlookup パラメータ, 58
csconfigurator.sh スクリプト, 36
csdb ユーティリティ, 73
csdomain ユーティリティ, 19
csmig 移行ユーティリティ
機能, 52
構文, 54
実行手順, 55
説明, 52
要件, 53
csrename ユーティリティ, 78

D

Directory Server、Sun ONE, 18, 27
Directory Server 設定スクリプト
インタラクティブモード, 31
機能, 28
構文, 29
サイレントモード, 29
実行するための要件, 28
実行手順, 29
情報の収集, 18
説明, 27
例, 31

ワークシート, 81

DISPLAY 環境変数, 36

I

ics2migrate ユーティリティ, 63

ics50-schema.conf, 89

ine.cancellation.enable パラメータ, 59

ine.invitation.enable パラメータ, 59

iPlanet Calendar Server 2.x、移行, 47

iPlanet Directory Server, 88

L

LDAP Calendar Lookup Database (CLD) プラグイン, 52

LDAP サーバー

定義, 100

LDAP スキーマ

Calendar Server に合わせた更新, 87

ics50-schema.conf, 89

um50-common-schema.conf file, 89

LDAP ディレクトリサーバーと csrename ユーティリティ, 78

local.servergid, 101

M

Messaging Server、Sun ONE, 18, 27, 28

N

ncs4migrate.exe ユーティリティ, 70

Netscape Calendar Server 4.x、移行, 47

Netscape Directory Server, 89

R

「Ready to Configure」 パネル, 45

「Ready to Configure」 パネル、設定プログラム, 45

rebuild コマンド, 73

「Runtime Configuration」 パネル、設定プログラム, 42

S

「Select Directories」 パネル、設定プログラム, 44

service.admin.alarm パラメータ, 59

service.dwp.enable パラメータ, 58

service.dwp.port パラメータ, 58

service.ens.enable パラメータ, 59

service.notify.enable パラメータ, 59

Sun ONE Directory Server, 18, 27

Sun ONE Identity Server, 19

Sun ONE LDAP Schema, 19

Sun ONE Messaging Server, 18, 27, 28

Sun ONE Portal Server, 19

SUNWica5 パッケージ、アンインストール, 25

SUNWics5 パッケージ、アンインストール, 25

U

「User Preferences and Authentication」 パネル、設定プログラム, 39

X

xhost ユーティリティ, 36

X-Windows 接続、設定プログラムを使用, 36

あ

アクセス権、Calendar Server, 100
 アクセス制御エントリ (ACE), 100
 アラームイベント, 100

い

イベント, 100
 イベント通知サービス (ENS), 101
 インスタンス、Calendar Server, 101
 インストールと設定、計画, 17
 インストールと設定の計画, 17

か

「概要」パネル、設定プログラム, 46
 カレンダ ID (calid), 101
 カレンダグループ, 101
 カレンダ検索データベース, 101
 カレンダデータの移行
 Calendar Server 2.x からの, 63
 Netscape Calendar Server 4.x からの, 70
 カレンダデータベースファイル、csrename ユー
 ティリティ, 78

き

共通名 (cn), 101

く

グループ ID (GID), 101

さ

サーバールート, 102
 サービス、Calendar Server, 102

し

識別名 (DN)
 定義, 102
 情報、Calendar Server 設定、情報の収集
 Calendar Server 設定, 20
 情報、Directory Server の収集する情報
 Directory Server, 18
 シングルサインオン (SSO)、Identity Server での,
 19

す

スキーマ
 Calendar Server に合わせた更新, 87
 スキーマ、使用するスキーマの決定, 19

せ

設定プログラム
 「Administration, User Preferences and
 Authentication」パネル, 39
 「Ready to Configure」パネル, 45
 「Runtime Configuration」パネル, 42
 「Select Directories」パネル, 44
 「概要」パネル, 46
 「メールとメールアラーム」パネル, 41
 「ようこそ」パネル, 38
 設定プログラム (csconfigurator.sh), 36

て

て

ディレクトリサービス, [103](#)

データの移行

Calendar Server 2.x からの, [63](#)

Netscape Calendar Server 4.x からの, [70](#)

デフォルトカレンダー, [103](#)

と

ドメイン、ホスト (仮想), [52](#)

に

認証, [103](#)

ふ

プラグイン、Calendar Server, [103](#)

へ

ベース DN (識別名), [103](#)

ほ

ホスト (仮想) ドメイン, [52](#)

め

「メールとメールアラーム」パネル、設定プログラム, [41](#)

ゆ

ユーザー ID (UID), [103](#)

よ

「ようこそ」パネル、設定プログラム, [38](#)

り

リソースカレンダー, [103](#)

ろ

ログファイル、アンインストーラ, [25](#)

わ

ワークシート

Calendar Server 設定, [83](#)

Directory Server 設定スクリプト, [81](#)